琉球大学学術リポジトリ

宇文氏研究

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学法文学部
	公開日: 2010-01-07
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 長部, 悦弘, Osabe, Yoshihiro
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/14547

宇文氏研究

長部悦弘

序

宇文氏は匈奴系鮮卑族であり、[1] 史乗いくつかの系統がみとめられるが、他の鮮卑族が文人士大夫化・文人官僚化していく北魏代から唐代にかけて、[2] どの程度漢族の学問を受容し、文人士大夫化・文人官僚化していったのか、各系統毎に検討することとする。

1　北魏代・東西両魏・北斉・北周代

北魏代宇文氏は、一〇の系統が認められる。①宇文活撥・宇文福の系統、②宇文阿生・宇文忠之の系統、③宇文豆頽・宇文麒麟の系統、④宇文求男・宇文金殿の系統、⑤宇文直力覲・宇文弢の系統、⑥宇文陵・宇文泰の系統、⑦宇文陵・宇文洛の系統、⑧宇文虬の系統、⑨宇文伊與敦・宇文盛の系統、[3] ⑩宇文莫豆干・宇文貴の系統である。北魏孝文帝代四九三年の洛陽遷都以後、①宇文活撥・宇文福の系統、②宇文阿生・宇文忠之の系統、③宇文豆頽・宇文麒麟の系統、④宇文求男・宇文金殿の系統、⑤宇文直力覲・宇文弢の系統は河南洛陽におり、⑥宇文陵・宇文泰の系統、⑦宇文陵・宇文洛の系統、⑧宇文虬の系統、⑨宇文伊與敦・宇文盛の系統は武川鎮に定住していた。⑩

宇文莫豆干・宇文貴の系統は夏州にいた。最初に①宇文活撥・宇文福の系統からみてみよう。

①宇文活撥・宇文福の系統

宇文活撥・宇文福の系統は、宇文福の代に孝文帝に随って洛陽へ徙往した。宇文福の祖父宇文活撥は、後燕成武帝（慕容垂）に仕えて唐郡内史となり、北魏道武帝が後燕恵愍帝（慕容宝）を平定すると、入国し、第一客として遇された。宇文福の父親は、名前・官歴がともに不明である。

宇文福自身は太僕少卿・太僕卿・都官尚書といった文官を経験したが、学問を習った痕跡は認められない。「少くして驍果にして、膂力有り」（『魏書』四四宇文福伝）とあり、孝文帝代四七七年に羽林郎将に任命されたのを皮切りに、孝明帝代に懐朔鎮将・散騎常侍・都督懐朔・沃野・武川三鎮諸軍事・征北将軍を以って終える、その官歴の大部分は、武官が占めている。その間宇文福が踏んだ武官を適宜拾うと、孝文帝代には羽林郎将の後に建節将軍、南征都将、顕武将軍、恢武将軍・北征都将、冠軍将軍・後軍将軍、司衛監、冠軍将軍・西道都将・征虜将軍、驍騎将軍、武衛将軍、征北将軍・北征都将、などを歴任した。宣武帝代には五〇〇年に平遠将軍・南征統軍を拝した後、征虜将軍などを経て、五一二年から五一五年までの間には左衛将軍を領した。四八二年から四九三年までの間には南斉を撃って勲功を立て、柔然を撃破した。実戦面をみると、四九八年には右衛将軍楊播とともに孝文帝の南斉親征軍の前軍を率いて、南斉明帝の派遣してきた崔慧景・蕭衍の軍を、鄧城において羽林の高車兵五百騎を用いて潰走せしめた（『魏書』四四宇文福伝）。さらに蕭衍の軍を襄陽において破った（『魏書』九八蕭衍伝）。宣武帝代には五〇〇年に寿陽に鎮していた南斉の豫州刺史裴叔業が北魏に投降の意志を表明したのを受けて、彭城王元勰

を総帥に据えて軍を派遣した折りに、淮南の重鎮建安を攻略し、義陽を攻める足がかりを確保し、寿陽の防備を固めるのに貢献した。同年に南斉の蕭衍の軍を黄峴・武陽・平靖の三関から出て討ち、東豫州刺史田益宗と連携して豫州の蛮を抑えた。宇文福の武才は孝文帝の認めるところであり、戎服を賜与され、四九三年に豫州に行幸した時に、精騎一千を領して背後を護衛した。鄧城攻撃に際して、軍規がよく整い、兵士もそれに十分慣れていると、嘉賞された。

四九三年の洛陽遷都より前に、宇文福は都牧給事を経験していた。洛陽遷都時には冠軍将軍・後軍将軍となっていたが、孝文帝の命を受けて牧馬用の土地を物色し、石済津以西、河内郡以東、黄河を挟む南北およそ五百kmを牧地とし、馬を当然含むであろう種々の家畜を平城からそこに移すに当って、上手に養い、損失を出さず、孝文帝から賞賛された。その後孝文帝代に太僕典牧令に任命された。宣武帝代には文官で九寺の一である太僕寺の副長官の太僕少卿と長官の太僕卿に任ぜられた。太僕寺は馬を管理する衙門であり、管理される馬は北魏の軍事装備の要ともなる騎兵用・輜重用に役使される軍馬であったと思われる。宇文福が文官で高位の太僕少卿（正四品上）・太僕卿（正三品）に任命されたのは、文官としての才能が評価されたからではなく、牧畜の能力を高く買われたからに違いない。宇文福は、前線の戦闘において活躍しただけではなく、平時に軍備を充実させる上においても多大な役割を果たしたのであった。

以上見てきたことに照らして、宇文福は学問を習得して文官として官界に立つというよりも、軍事的能力により立っていた武人といえる。

宇文福の子宇文善・宇文延・宇文慶安もまた学問を習ったという確証はない。宇文善は司空掾から平南将軍・光禄大夫に遷った後、「孝昌末、北征して戦歿す」（『魏書』四四宇文福伝）とあり、五二四年に沃野鎮人破落汗拔陵の

反乱を契機に北魏の支配体制を大きく揺るがした六鎮の乱の鎮圧に従って、斃れた。宇文延は宣武帝代に五〇八年から五一二年の間に奉直請より釈褐し、直後・員外散騎常侍を歴任した。孝明帝代には五二五年から五二八年の間に仮節・建威将軍・西道別将を授けられ、ついで員外散騎常侍に除せられ、直寝に転じた。孝明帝代五一二年に冀州において沙門法慶が起こした大乗の乱は四ヶ月も経たぬうちに平定されたが、翌五一三年にその餘賊が父宇文福が州刺史として赴任していた瀛州城に押し寄せて闖入してきたときに、父宇文福を命懸けで救い出し、賊を撃退した。五二五年から五二八年の間には、「関・隴に援けに赴き、戦功有り」とある（『魏書』四四宇文延伝）。五二四年に高平鎮の胡琛が沃野鎮人破落汗拔陵に呼応して反乱を起こし、秦州で莫折太提・莫折天生・莫折念生父子が反乱を起こした。関・隴地方の反乱を鎮圧するために蕭宝夤を派遣したが、鎮圧に手を焼き、五二七年には蕭宝夤が反旗を翻し、孝荘帝代五三〇年に鎮圧された。宇文延が関・隴地方に赴いて助けたのは、五二七年以前であり、助けた相手は蕭宝夤であったと思われる。最期は「万俟醜奴と戦い歿す」とあり（『魏書』四四宇文延伝）、五二八年に関中において反乱を起こした高平鎮人万俟醜奴の討伐に従軍して、戦没した。宇文延が参加した部隊は、明記されていないが、おそらく爾朱栄の一族爾朱天光を頭に戴き、武川鎮出身の賀拔岳を副頭目とする部隊であったかとおもわれる。いずれにせよ、宇文善と宇文延は、文人とはいえず、武人とみてよいであろう。宇文慶安は、平北将軍・武衛将軍といった武官に就いた以外に、尚書殿中郎中といった通常漢族士大夫が任ぜられた尚書省郎官に任命された点から、[4] 学問を身に付けていた可能性がある。

宇文活撥・宇文福の系統は、宇文福の孫の宇文仲鸞・宇文仲融・宇文仲衍の代までしか辿ることができない。宇文仲鸞は宇文延の子であり、東魏で丞相府長流参軍に就いたことが記されているのみで、他に記述がない。宇文仲融と宇文仲衍は、いずれも宇文慶安の子で、名前のみが記されているだけで、他に記述がない。したがって宇文福

の孫の世代において、学問を学び、身に付けるようになったか否か、軍事にどの程度関わっていたのか、確めようがない。

以上から、宇文活撥・宇文福の系統において、北魏代に学問を学んでいたことは、確認できない。僅かに宇文慶安が学問を学んでいた可能性があったと推察されるのみである。逆に、宇文福の資質や、武官が大部分を占める官歴、宇文善と宇文延が北魏末の反乱鎮圧に参加した事実から、宇文活撥・宇文福の系統は、鮮卑族の漢文化導入の中心たる洛陽にいたとはいえ、北魏代には学問を積極的に取り込んだ様子はなく、むしろ武人色の濃厚な家であったと推測される。

②宇文阿生・宇文忠之の系統

宇文活撥・宇文福の系統以外に、北魏代に河南洛陽に移住したのが、宇文阿生・宇文忠之の系統である。宇文阿生は安南将軍に就き、その子宇文侃は治書侍御史に任命された。宇文阿生・宇文忠之の系統は、もと平城に居住していた。河南洛陽に移住した時期は確定できないが、宇文阿生か宇文侃の代であるかと推察される。確実なのは、宇文侃の子宇文忠之の代には河南洛陽に居住していたことである。宇文忠之は「文史を猟渉し、頗る筆札有り」とあり（『魏書』八一宇文忠之伝）、宇文氏ではじめて学問を習得したのが確かめられる人物である。その官歴は、ほとんど学問を身に付けている漢族士大夫が就く文官が占めている。北魏代に太学博士より釈褐し、東魏では五三四年に中書侍郎に除せられ、五四三年には尚書右丞に任命された。武官となったのは、五四三年に尚書右丞とともに安南将軍を兼ねたくらいであった。実戦面においても、北魏末の動乱や東西両魏の争覇戦の渦中にいたにもかかわ

らず、軍事的能力を発揮した形跡はない。五三八年には中書侍郎に通直散騎常侍を兼ねて、梁の武帝のもとに副使として派遣された。この時正使であったのが、滎陽郡の名族鄭伯猷であった。通常南北朝の外交使節に選ばれるのは、学才のある人物であった。鄭伯猷は若い時分から博学で文才があると知られており、司州の秀才に挙げられた後、太学博士・尚書外兵郎中・国子祭酒を歴任し、その間起居注を掌った（『魏書』五六鄭伯猷伝）。宇文忠之が梁に派遣される使節に加えられたのは、鄭伯猷と同様にその学才が高く評価されていたからであろう。以上からみて、宇文忠之は戦陣において軍事的能力を発揮して、勲功を立てる武人というよりも、学問により文官に就く文人とみなせる。

③宇文豆頽・宇文麒麟の系統

宇文測は、宇文泰の族子である。彼の高祖宇文中山・曾祖宇文豆頽・祖父宇文麒麟・父宇文永は、官歴は全く不明であるが、顕官に至ったとされている（『周書』二七宇文測伝）。宇文測自身は奉朝請・殿中侍御史より起家し、司徒右長史・安東将軍に累遷し、宣武帝の娘陽平公主を娶り、駙馬都尉を拝した。北魏孝武帝が高歓と軋轢が生じた時に、関中にいた宇文泰のもとに連絡役として走り、五三四年には孝武帝の西遷に洛陽から随従した。

宇文測は、洛陽に居住したか否かは、史乗に明記されていない。彼の生年が四八九年であり、四九三年に四歳で洛陽遷都に際会した。おそらく父親の宇文永もまた、洛陽遷都を経験したはずである。洛陽遷都後、洛陽に移住した人々が昇官や婚姻の上で優遇されていたのに対し、北辺の六鎮鎮民が賤民化し、官界での昇進の道が閉ざされ、結婚の範囲も差別され限られた。[5] そのような状況下で、宇文永は就任した官やその時期は不明であるが、高位高官

に到達した旨が史乗に記されているのは、洛陽遷都後の官界での到達点を含んでいるものとおもわれる。宇文測は、その生年からみて、起家したのは洛陽遷都後である。上に列挙した、彼が任命された官は、京官である。洛陽遷都後京官に任命され、北魏の宗室と通婚するなど、任官や結婚の上で優遇されている点から、洛陽に居住していたと考えられる。宇文測は、「少くして篤く学び、毎に旬月は戸牖を窺わず」とある（『周書』二七宇文測伝）。宇文測の弟宇文深は、経史を学んだことは明記されていないが、「好んで『兵書』を読」み（『周書』二七宇文深伝）、北魏孝荘帝代五二八年に秘書郎から起家している点から、学問を学んでいたものとおもわれる。宇文測・宇文深兄弟が学問を学んだ時期は、北魏代洛陽遷都後であろう。宇文深の子宇文孝伯は、「其の生まるる、高祖（武帝）と日を同じゅうすれば、太祖（宇文泰）甚だ之を愛し、第内に養う。長ずるに及んで、高祖（武帝）と同に学ん」だ（『周書』四〇宇文孝伯伝）。宇文孝伯の生年月日は、北周武帝と同じであるから、西魏成立後五四三年である（『周書』五武帝紀上）。北周が五五七年に成立した時点で、一五歳となっており、その前に学問を習っていたものとおもわれる。

以上を要するに、宇文測・宇文深兄弟は、北魏代洛陽遷都後に学問を学び、宇文孝伯は西魏において学問を修めていたとみられる。

宇文測の北魏代に辿った官歴は、先に挙げたもので尽きている。西魏で辿った官歴をみると、文武両官に就いている。文官は、五三四年に丞相府の右長史となり、ついで通直散騎常侍・黄門侍郎に除せられた。五三八年には侍中・長史を拝し、五四〇年に免官された後、行汾州事に任命された。五四二年には金紫光禄大夫を加えられ、行綏州事に転じ、五四四年に太子少保を拝した。武官は五四〇年から五四二年の間に使持節・驃騎大将軍・開府儀同三司・大都督に任命されたことがあったが、戦陣で勲功を挙げた事実は認められない。丞相府の右長史であった時に、

丞相であった宇文泰から、軍国の政事を多く任され、宗室元氏の昭穆遠近を詳定するなど、むしろ文官として貢献した。宇文測の生涯は、武人としてよりも、むしろ学問を基に活動する文人としての側面が滲み出ているようにおもわれる。

他方、宇文深は、北魏代・西魏・北周で辿った官歴をみると、文官・武官の両方を経験している。彼が任命された文官は、北魏孝荘帝代五二八年に秘書郎から起家した後、西魏が成立した翌五三五年に丞相府主簿に任ぜられ、ついで尚書直事郎中に転じた。西魏は五五六年に六官制度を採用し、六官制度は五五七年に北周が成立した後も五八一年に隋が禅譲を受けるまで存続した。六官制度下で宇文深が就いた主な文官は、西魏で五五六年に小吏部下大夫に任命され、北周ではまず吏部中大夫に除せられ、五六〇年に宗師大夫を拝し、軍司馬に転じ、五六一年に京兆尹に就いた後、司会中大夫になった。以上挙げた文官の中、尚書直事郎中は、言うまでもなく尚書省郎官である。小吏部下大夫は吏部郎中に相当し、軍司馬は兵部郎中に対応し、司会中大夫は戸部郎中または度支郎中に匹敵し、六官制度下で尚書省郎官に当る官に任命された。[6] 五三五年に丞相府主簿に任ぜられたのは、丞相であった宇文泰が謀略に優れていた宇文深と政事を諮ることを望んだからである（『周書』二七宇文深伝）。「選曹に在るに及んで、頗る時誉を獲」とあり（『周書』二七宇文深伝）、小吏部下大夫・吏部中大夫（吏部侍郎に相当）であった時に行った仕事が高い評価を受けた。以上から、宇文深は文官としての政務能力・実務能力に秀でていたと判断される。

彼が踏んだ武官は、北魏孝荘帝代五二八年以後に厲武将軍を拝し、五三〇年には子都督を授けられて、宿衛の兵卒を領し、五三四年には部下の兵士を率いて孝武帝の西遷に従った。西魏では五五五年に車騎大将軍・儀同三司・散騎常侍に進んだ。北周では五五七年に成立した後、驃騎大将軍・開府儀同三司に任命された。[7] 実戦においても、北周においては軍事活動に従事していないが、西魏軍の一員として東魏との争覇戦と稽胡討伐に参加した。五三七

年には小関（潼関の周辺）の戦い並びに沙苑（華州）の戦いに加わり、五三八年には洛陽進攻の一翼を担い、河橋（洛陽）の戦いに従った。五三八年には西魏軍は洛陽の北邙山で東魏軍に大敗を喫するが、前年には小関と沙苑で大勝を博した。小関では高歓が本陣の蒲坂（河東郡）から潼関に分遣してきた驍将竇泰を倒し、沙苑では高歓の率いる兵士一〇万人中七万を虜獲した。蒲坂で高歓が構える本陣を衝くよりも、小関で竇泰を邀撃するよう策を献じたのも、高歓を走路で迎撃するよう進言したのも、宇文深であった。彼の軍事上の策略が、小関と沙苑での軍事上の勝利をもたらしたのであった。五四〇年には、白額稽胡を討伐して戦功を立てた。宇文深は宇文泰の近侍にあって、常に策を進言したが、その策は政治上の事柄のみならず、軍事上の策略も数多く含んでいたことであろう。宇文泰が宇文深の作戦能力を極めて高く買っていたことは、宇文深の勧告に従って弘農郡を攻略して洛陽進攻の橋頭堡を獲得するのに成功した時に、前漢高祖の謀臣陳平に擬したことから窺える。宇文深は好んで兵書を読んだとされるが（『周書』二七宇文深伝）、その知謀の根源は兵書にあったとみてよいであろう。

以上から、宇文深は文武両才の人物であり、学問を政務・実務・軍事に活かして文武両方の官として官界に立ったといえる。

宇文深の子宇文孝伯もまた、文武両官を踏んだ。彼の官界での歩みは、北周明帝代に文官に就いたのに始まる。文官からみると、北周孝明帝代五五九年に宗師上士を拝した。武帝代には、右侍上士を拝し、五七二年以後に司会中大夫・左右小宮伯・東宮左宮正を経歴し、その後宗師中大夫を拝し、五七六年には京兆尹を経て、左右宮伯となり、さらに内史下大夫に任ぜられた。宣帝代五七八年には、小冢宰に就いた。この中司会中大夫は尚書省郎官の戸部郎中または度支郎中に匹敵し、内史下大夫は中書侍郎に相当した。実務の要を握る尚書省郎官や詔勅起草に関わる中書省官に当る官に就いた点から、実務能力や学才を備えていたものとおもわれる。

武官は、北周武帝代五六〇年に衛士である右侍上士となり、五七二年に開府儀同三司を授けられ、五七六年には大将軍を加えられ、五七八年には司衛上大夫に任ぜられ、宿衛の兵馬を総轄した。宣帝代には、五七八年に行軍総管に就けられた。実戦では、北周武帝代五七六年に入寇した吐谷渾を皇太子宇文贇（後の宣帝）が征討したのに従った。この時青海西方の吐谷渾の拠点伏俟城を突き、その可汗夸呂を追い払った（『周書』五〇吐谷渾伝）。宣帝代五七八年に行軍総管として、行軍元帥宇文盛の指揮下で汾州の稽胡帥劉受羅（邏）千の反乱を平定するのに参加した。吐谷渾遠征当時、軍中の事の多くは、宇文孝伯が決めた（『周書』四〇宇文孝伯伝）。吐谷渾に対して軍事的勝利を収める上で、宇文孝伯の力が大きく働いたものとおもわれる。

宇文孝伯は、前にみたごとく、北周武帝と同じ日に生まれたが故に宇文泰に可愛がられ、その邸第内で養われ、武帝とともに机を並べて学問を習った。それだけに武帝が彼に寄せる信頼は、絶大であった。五七二年に実権を握っていた宇文護を宮中で誅殺して奪権した時に、事前に謀議に加わった。五七六年に武帝が雌雄を決すべく自ら北斉征服の大軍を起こした時には、留守を預かった。五七八年には司衛上大夫に任ぜられ、宿衛の兵馬の統率を委ねられたのは、突厥遠征から雲陽宮に帰った時に病に臥せ死期が近いのを悟った武帝が後事を託そうとしたからである。

以上みたごとく、宇文孝伯は文武両才を兼ね備え、武帝との信頼関係を背景に、文武両官を踏んだと言えよう。

宇文孝伯の子宇文歆は、史乗に名前が見えるのみで、学問習得の有無・官歴・軍事的能力の程度が全く不明である。

要するに、宇文豆頽・宇文麒麟の系統は、宇文測・宇文深兄弟・宇文孝伯の二世代が、北魏代洛陽遷都後に学問を学びはじめ、北魏・西魏において文武両官に就いて官界に地位を占めた。

④宇文求男・宇文金殿の系統

宇文求男・宇文金殿の系統は、宇文神挙・宇文神慶兄弟の高祖宇文晋陵、曾祖父宇文求男は、北魏代に就いた官は不明であるが、高位顕官に達したとされる。祖父宇文金殿は、北魏代に鎮遠将軍・兗州刺史に昇った。北魏孝文帝代四九九年に定めた職令によれば、官品は鎮遠将軍が正四品下、兗州刺史は正三品・従三品・正四品上のいずれかであり、五品以上に昇っており、高官に到達したとみてよいであろう。父の宇文顕和は、北魏孝文帝代四九八年の生まれであるが、北魏孝武帝が五三〇年に平陽王に封ぜられてから五三二年に即位するまでの間に仕え、孝武帝が践阼すると、近衛軍の指揮官に任命された。五三二年に冠軍将軍・閤内都督に擢授され、さらに五三四年に孝武帝と実権を握った高歓との間に対立が生じると、朱衣直閤・閤内大都督に遷り、孝武帝の入関に随従した。宇文神挙・宇文神慶兄弟の中、宇文神慶は河南洛陽人とされる（『隋書』五〇宇文神慶伝）。宇文神慶の史乗に載っている事蹟は北周と隋のものに限られ、生卒年も不明であるので、本人が北魏代洛陽遷都後に果たして洛陽に居住していたか否かは、確定できないが、おそらく河南洛陽は本貫を記したとみられる。宇文求男・宇文金殿の系統は、宇文神挙・宇文神慶兄弟の高祖宇文晋陵、曾祖父宇文求男が北魏代に高位顕官に達したこと、祖父宇文金殿も北魏代に高官に達したとみられること、父宇文顕和が洛陽に駐屯している近衛軍の指揮官となっていること、宇文神慶の本貫として河南洛陽と記されていることからみて、宇文金殿の代に洛陽に移ったものと推測される。

宇文顕和は、北魏代に「頗る経史を渉っ」た（『周書』四〇宇文顕和伝）。その子宇文神挙は、「風儀を偉にして、辞令を善くして、博く経史を渉り、性篇章を愛し」とあり（『周書』四〇宇文神挙伝）、西魏で学問を学んだとみられる。その弟宇文神慶は、北周の初めに「業を東観に受け、頗る経史を渉っ」た（『隋書』五〇宇文慶伝）。

兄弟の父宇文顕和は、「膂力人を絶ち、弓の数百斤なるを彎き、能く左右に馳せ射る」とあり（『周書』四〇宇文顕和伝）、武芸に優れていた。その官歴をみると、ほとんど武官一色である。北魏孝武帝代には、前に述べたように、五三二年に冠軍将軍・閤内都督に擢授され、さらに五三四年には朱衣直閤・閤内大都督に任命された。西魏では帳内大都督となり、持節・衛将軍・東夏州刺史を経て、車騎大将軍・儀同三司に進み、散騎常侍を加えられた。学問を習ってはいたものの、武人として生涯を送った。

宇文神挙は、北周武帝代・宣帝代においてその官歴を刻んだ。官歴をみると、文武両官を経歴している。文官は、中央では経験していない。したがって学才を必要とする中書省官や実務能力が求められる尚書省郎官に相当する六官制度下の官には、就いてはいない。宇文神挙が任命された文官をみると、北周武帝代五七二年に京兆尹に任ぜられ、五七四年に熊州刺史に出た後、五七六年には并州刺史に任命された。武官は、北周明帝代五五八年に中侍上士より起家したのを皮切りに、武帝代五六一年以後に帥都督を授けられ、ついで大都督・使持節・車騎大将軍・儀同三司に遷り、五六四年に驃騎大将軍・開府儀同三司に進んだ後、小宮伯下大夫に任ぜられ、五六六年には右宮伯中大夫を拝した。五七六年には并州刺史とともに上開府儀同大将軍を加えられ、ついで上大将軍に任ぜられた後、俄かに柱国大将軍に進み、五七八年には司武上大夫に転じた。宣帝代に入ってからは、五七八年に并州総官に任命された。実戦では、宿敵の北斉や突厥との会戦で活躍した。北周武帝代五七六年に北斉領の陸渾など五城を抜き、さらに武帝の東方親征に従い、五七六年か五七七年には并州に押し寄せてきた東寿陽県の反乱集団を平定し、五七八年に武帝が突厥と戦うべく出馬した時には姫願とともに五道より兵を率いて従軍し、突厥の後押しを受けて即位した旧北斉宗室の高紹義を迎えようと、当地の名族盧昌期と祖英伯らが范陽郡で起こした反乱を平定した（『北斉書』一二高紹義伝）。宣帝代五七八年に行軍元帥宇文盛の指揮下に入り汾州で反乱を起こした稽胡帥劉受羅（邏）千と

連合して南下してきた突厥軍を敗走させ、稽胡の後援を断った。

宇文神挙は、盧昌期に同調して反乱に加わった盧思道を本来処刑すべきところを文才を認めて赦すほどに、学問や士人を尊んだ。自身も詩歌を非常に好んだが故に、文苑に関心を注いだ明帝が遊ぶ際、つねに陪侍を許された（『周書』四〇宇文神挙伝）。他方、騎射に長じ、「戎に臨み寇に対し、勇にして謀有り」（『周書』四〇宇文神挙伝）とあり、上でみたごとく軍功を立てた。文武両才を具備していたがために、「任文武を兼ぬるを得」（『周書』四〇宇文神挙伝）とあるごとく、文武両官に任命されたといえる。ただ官歴をみると、文官が武官より少なく、中書省官や尚書省郎官を経験しておらず、しかも就いた文官は軍事に関わる州刺史であった。彼が州刺史として赴任した熊州は北斉領を指呼にみる最前線に位置し、并州は北斉の副都であり彼が任命された時期は北周が占領した直後であり情勢がまだ不穏な時期であったかとおもわれる。彼の民政上の手腕とともに、軍事上の能力が買われて任ぜられたものとかんがえられる。業績も、軍事上のものが目立つ。文武両才を兼ね、文武両官を経たとはいえ、その生涯は武人としての活動が前面に出ている。

弟の宇文神慶は、その官歴はすべて武官である。北周孝閔帝代か明帝代に都督を授けられた後、車騎大将軍・儀同三司に累遷し、さらに柱国掾となった。武帝代五七二年には驃騎大将軍に進み、開府を加えられ、五七六年には大将軍を授けられた。その後五七七年に行軍総管・延州総管を歴任し、寧州総管を経て、静帝代五八〇年には再び行軍総管となり、ついで上大将軍に進み、柱国を加えられた。隋代には五八一年に左武衛将軍を拝し、位を上柱国に進め、数年後涼州総管に除せられた。彼の戦歴は北周孝閔帝代か明帝代に文州の反乱鎮圧に応募して参加し、それを破った。北周武帝代には、対北斉戦や稽胡討伐で活躍した。武帝が五七五年に河陰城を攻略した際には直属軍の先鋒を務め、翌五七六年には晋州城を抜くのに従い北斉後主と戦い、并州城攻撃に参加し、五七七年には北斉の

首都鄴を占領した後もなお冀州城を拠点に頑強に抵抗を続ける高潛を、宇文憲・楊堅とともに下した。また五七七年北斉平定後に聖武皇帝を号して反旗を翻した稽胡帥劉没鐸を、行軍元帥宇文憲の下で行軍総管として討った。静帝代五八〇年には行軍総管として、江南に南征した。宇文神慶は文州の反乱鎮定の功績により都督を授けられたり、北斉征服戦では最も高い勲功を立てたと武帝から称揚され、位を大将軍に進められたり、武勲赫々たるものがあった。宇文神慶は、学問を習ったことは先に見た通りであるが、「書は姓名を記すに足るのみ。安んぞ能く久しく筆硯を事とし、腐儒の業を為さんや」（『隋書』五〇宇文慶伝）と述べたごとく、学問を以って立つことを潔しとしなかった。専ら武官に就いて軍功を立て、武人としてその生涯を全うしたといえる。

⑤宇文直力覲・宇文弢の系統

宇文直力覲・宇文弢の系統は、『隋書』五六伝によると、宇文弢の祖父が宇文直力覲、父が宇文珍となっている。各々就いた官として、鉅鹿太守、宕州刺史が書かれている。『新唐書』七一宰相世系表一下では、宇文弢の曾祖父が宇文直力勤、祖父が宇文賢、父が宇文瑋となっている。各々就任した官として比部尚書、定州刺史、宕州刺史が記されている。

『隋書』五六宇文弢伝をみる限り、祖父宇文直力覲と父宇文珍は、学問を学んではいない。宇文直力覲・宇文弢の系統では、宇文弢が「博く学び多く通ず」・「詔を奉りて『五礼』を修定す」（『隋書』五六宇文弢伝）とあり、はじめて学問を学んだことが認められる。因みに著わした辞賦が二〇余万言もあり、書いた『尚書注』・『孝経注』が世に流布した。宇文弢が学問を学んだ時期は、西魏代か北周代であると推察される。彼は北周代から隋煬帝代に

かけて文武両官を踏んだ。彼が隋代に任命された官はあとでみることとする。北周代では、就いた官は、文武両官であった。文官は、京官と地方官に就いた。京官は、最初に礼部上士に任ぜられ、ついで少吏部に累遷し、内史都上士（中書舎人に相当）に転じ、宣帝代五七八年には左守廟大夫に遷った。地方官は、宣帝代または静帝代に滄州刺史・南司州刺史、静帝代に黄州刺史・南定州刺史を歴任した。武官は、北周武帝代五七七年に上儀同を拝した。実戦では、北周武帝代五七六年に別働隊を率いて武帝の晋州攻略に従い、さらに翌五七七年に鄴を落とすまで武帝に随従した。宣帝代五七八年に甘州を侵した突厥を、監軍として侯莫陳昶とともに追撃した。五七九年には、梁士彦に従って陳の寿陽を抜き、静帝代五八〇年には南に亡命した司馬消難を追って遭遇した陳軍を漳口で破った。

⑥宇文陵・宇文泰の系統

北魏が洛陽に遷都した後も武川鎮に留まり続けた宇文氏は、宇文陵・宇文泰の系統である。宇文陵・宇文泰の系統は五二四年に起きた破落汗拔陵の乱をきっかけに北魏全域に広がった動乱に巻き込まれて関中にまで南下した。五三三年に北魏の孝武帝が関中に西遷すると、高歓は孝静帝を立てて対抗し、北魏は東西に分裂した。孝武帝を迎え入れた宇文泰は、西魏の実権者として君臨することとなった。西魏成立後、宇文泰は己が子のために、儒者楽遜・盧光・盧誕を招き学問を授けさせた。五五三年に「楽遜を召して諸子に教授せしむ。館に在ること六年、諸儒と分かちて経業を授く。」（『周書』四五楽遜伝）とある。楽遜は『孝経』・『論語』・『毛詩』及び服虔が注を加えた『春秋左氏伝』を講義した。楽遜は五五七年の北周成立以後太学博士・小師氏下大夫を歴任するが、譙王宇文儉以

下の諸王が束修を納め、弟子の礼を執り、経学を授けられた。武帝に学問を教えたのは、范陽郡の名族盧光である（『周書』四五盧光伝）。同じく范陽郡の名族盧誕は、宇文震と明帝に『礼記』と『尚書』を教授した（『周書』十三宇文震伝）。

諸儒の教育の御蔭で、宇文泰の子は学問に慣れ親しんだ。宇文震は、「年十歳にして、『孝経』・『論語』・『毛詩』を誦し」た（『周書』十三宇文震伝）。明帝は、「幼くして学を好み、博く群書を覧、善く文を属り、詞采温麗であ」った（『周書』四明帝紀）。彼の著わした文章は、十巻に上った。宇文憲は、「少くして高祖（武帝）と倶に『詩』伝を受け、咸機要を綜べ、其の指帰を得」た（『周書』十二宇文震伝）。宇文招は、「幼くして聡穎たり。博く群書を渉り、文を属るを好む。庾信体を学び、詞多く軽艷」であった（『周書』十三宇文震伝）。彼の著わした文集は十巻で、世に流布した。宇文迪は、「少くして経史を好み、解く文を属」った（『周書』十三宇文震伝）。

宇文泰の子で、北周で帝位に登った武帝は、五六六年に「正武殿に御し、群臣を集め、親しく『礼記』を講じ」た（『周書』五武帝紀上）。明帝は、「即位するに及んで、公卿已下文学の有る者八十餘人を麟趾殿に集め、経史を刊校す。又衆書を捃採して、羲・農自り已来魏末までを叙して『世譜』を為すこと、凡そ五百巻云々」とあり（『周書』四明帝紀）、経書と史書の校訂や『世譜』の編集という、おおがかりな文化事業を行った。

宇文陵・宇文泰の系統では、宇文泰の子以外にも、宇文泰に比較的近いもののなかにも、学問を習ったものを見出すことができる。例えば、宇文泰の長兄宇文顥の子宇文護、次兄宇文連の子宇文元宝、三兄宇文洛生の子宇文菩提は、早くも北魏代五二八年から五三一年までの間に一旦身を投じていた葛栄の反乱集団が滅んだ後に身を寄せた爾朱栄の拠点太原において、従兄弟の賀蘭祥とともに、成某という博士から学問を学んだ（『周書』一一宇文護伝）。宇文顥の孫宇文広が「少くして方厳にして、文学を好む」とあり（『周書』一〇宇文広伝）、さらに宇文顥の曾孫宇

文会が「幼くして、学を好む」とある（『周書』一〇宇文会伝）。

以上から、宇文陵・宇文泰の系統は、宇文泰の次世代に至ってはじめて学問を習ったと認められる。学問を修めた時期をみると、宇文陵・宇文泰の系統でおいてはじめて学問を学んだのが、宇文泰の甥宇文護・宇文元宝・宇文菩提であり、北魏代五二八年から五三一年までの間である。ついで習ったのが、宇文泰の子であり、五三四年の北魏の東西分裂後、西魏においてである。宇文泰が子のために儒者を招いたという点に着目すると、宇文護たち三名が北魏末に学問を学んだとはいえ、宇文陵・宇文泰の系統は西魏において本格的に子弟のために学問教育を開始したとみてよいであろう。宇文泰の子以外の宇文氏の構成員にも、学問教育が行われたものと推測される。宇文顥の孫宇文広、曽孫宇文会が学問を好んだのは、その結果であろう。

宇文泰の子の官歴をみると、西魏・北周において文武両官に任命されているものが多いが、文官中中書省官と尚書省郎官及び六官の中書省官と尚書省郎官に相当する官に就いたものはいない。

先に学問を学んだものとして挙例した数人の官歴をみてみよう。

明帝は、西魏文帝代から北周孝閔帝代五五七年に即位するまでの間、文武両官に就いた。文官は、西魏文帝代五五〇年に行華州事となり、ついで宜州諸軍事・宜州刺史を拝し、北周孝閔帝代五五七年に岐州諸軍事・岐州刺史に任ぜられた。岐州では、「治に美政有り」とされ（『周書』四明帝紀）、民政能力のあるところをみせた。武官は、西魏代五五〇年以後に宜州諸軍事・宜州刺史とともに開府儀同三司を拝し、恭帝代五五六年に大将軍を授けられ、北周孝閔帝代五五七年に柱国に進んだ。史書に、実戦に参加した記述は認められない。明帝の行跡をみると、先に述べたように、即位後に経書と史書の校訂や『世譜』の編集という、おおがかりな文化事業を進めたことが特筆される。当時軍旅については、宇文護が握っていた（『周書』四明帝紀）。それ故、軍事的才能を振るう余地はなく、

むしろ学才を発揮する方向に向かったとみられる。

武帝は、五六〇年に明帝の後を襲って即位するまでの間、北周において文武両官を歴任した。文官は、明帝代五五七年に蒲州諸軍事・蒲州刺史を授けられ、五五九年には大司空に昇った。大司空であった時には、御正を治め、宗師を領した。御正とは、詔勅を掌る中書省に相当する。武帝の学才が、活かされたとおもわれる。武官は、北周孝閔帝代五五七年に大将軍を拝し、明帝代五五七年に柱国に遷った。実戦は、即位より前には経験がなく、むしろ即位後に率先して軍を率い、軍事面で目覚ましい働きを示した。五七二年にそれまで軍政を掌握していた宇文護を倒して、親政をはじめてから本格的に軍事行動を主導した。五七五年に、親しく六万の六軍を率いて北斉の河陰の大城を攻め落とした。ただ武帝自身が、病に罹ったがために、北斉領の深部まで進撃することなく退却した。翌五七六年に再び軍を起こし、自ら晋州城を抜き、北斉の副都并州を攻略し、五七七年には北斉の首都鄴を衝いて占領し、宿敵北斉を滅ぼした（『周書』六武帝紀下）。五七八年には北斉滅亡後に避難してきた高紹義を北斉帝に立てて幽州に入寇してきた突厥を迎撃するために、六軍を率いた。尤もこの時には武帝が病に倒れ、成果を挙げることなく途中で軍を引き返した（『周書』五〇突厥伝）。かくのごとく武帝は御正を統轄する上で学識を活用したかとおもわれるが、五三四年に北魏が東西両魏に分裂して以来抱いてきた、北斉を併呑するという宿願を果たした功績に鑑みていえば、その才能は学問においてよりもむしろ軍事において十二分に発揮したといえよう。

宇文憲は、官歴をみると、文武両官に就いている。文官は、北周武帝代五六一年から五六四年までの間に雍州牧に任官し、五六八年には小冢宰に任ぜられ、五七二年には大冢宰に昇った。五六八年から五七二年までの間、実権者宇文護に親任され、賞罰に関してはすべて干与したり、宇文護の代理で多く聞奏したりした（『周書』一二宇文憲伝）。かかる点をみると、政務能力があったものとおもわれる。

武官は、北周孝閔帝代五五七年に驃騎大将軍・開府儀同三司を拝し、明帝代には五五七年に大将軍を授けられ、五五九年に益州総管に除せられ、ついで柱国に進んだ。武帝代五六八年には、大司馬に任ぜられた。実戦では、北周武帝代五六四年に宇文護の東征軍に参加して洛陽郊外の北邙山に駐屯し、五七〇年には北斉の斛律明月を洛水南より駆逐し、翌五七一年には汾州城を包囲していた北斉軍と戦い、五七六年には精騎二万を率いて武帝の親征軍の前鋒を務めて晋州攻略に加わり、さらに并州攻撃にも参加して北斉の皇族高延宗を捕捉した。五七七年には、北斉の首都鄴の攻撃に加わり、鄴を占領した後もなお冀州城を拠点に頑強に抵抗を続ける高潜を、楊堅とともに下した。また五七七年北斉平定後に聖武皇帝を号して反旗を翻した稽胡帥劉没鐸を、行軍元帥として宇文招らを指揮して討った。宇文憲は、「素より謀を善くし、算略多く、尤も撫御に長じ、任使に達し、鋒を摧き陣を陥れるのに、士卒の先と為り、群下感悦し、咸之が用を為す。」とあるが如く（『周書』十二宇文憲伝）、軍略に長け、戦闘において勇敢であり、軍の統率に優れていた。宇文憲はさきにみたように、学問を学び、政務能力を備えていたとおもわれるが、武人として秀でていた。五七二年に宇文護が武帝に粛清される以前は宇文護とともに政務を執ったが、粛清後実権を奪われた。五七二年以後は、専ら軍事方面にその才能を振るう場を見出したといえる。

宇文憲の弟宇文招は、文武両官を経ている。文官は、中書省官と尚書省郎官及び六官の中書省官と尚書省郎官に相当する官に就いてはいない。北周武帝代五七二年に大司空を授けられ、五七四年には雍州牧に除せられ、宣帝代五七八年に太師を拝した。武官は、北周武帝代五六一年から五六五年までの間に柱国を拝し、ついで益州総管に出、五七二年には大司馬に転じた。五七五年には後三軍総管となり、五七六年には上柱国に進み、五七七年には行軍総管となった。実戦面では、五七五年に後三軍総管として武帝の東征軍に参加し、翌五七六年には再び東征軍に加わり、汾州城を攻めた。五七七年には稽胡帥劉没鐸の反乱を制圧した。宇文招も文武両才を備え、文武両官を経歴し

た。

宇文逌は、その官歴をみると、すべて武官である。北周武帝代五七二年に大将軍を拝し、五七二年には柱国に進み、五七七年には行軍総管となり、ついで河陽総管に除せられた。宣帝代五七八年には上柱国に進み、さらに行軍元帥に任ぜられた。実戦では、五七七年に稽胡帥劉没鐸の反乱の鎮圧に従い、その頭目の一人で河西に拠っていた穆友らを破り、首八千級を挙げた。五七八年には行軍元帥として北周軍を率いて、陳軍と戦った。宇文逌は、文武両才を備えながらも、武官のみを経歴し、ひたすら軍事面において力を振るった。

宇文憲・宇文招・宇文逌のように学問を学んだ様子や程度は特筆されていないが、彼ら三人のように諸儒から学問を学んだとおもわれる宇文泰の他の子の官歴を、一瞥してみよう。

宇文直は、文武両官を歴任した。文官は、北周武帝代五六一年に雍州牧に任官し、五六四年に大司空に転じ、五七二年に大司徒に昇った。武官は、五六二年に柱国に進み、五六五年に襄州総管に出た。実戦では、武帝代五六七年に陳の湘州刺史華皎が帰附してきたのを迎えて、陳軍と沌口（郢州）で戦い、敗北した。

宇文儉は、文武両官に就いた。文官は、北周武帝代五七七年に大冢宰を拝したのみである。武官は、武帝代五六六年か五六七年に大将軍を拝し、五六七年に柱国に遷り、五七〇年に益州総管に出、五七六年には左一軍総管に任ぜられ、五七七年には行軍総管となった。実戦では、五七六年に左一軍総管として東征軍に従い、永固城（恒州）を抜き、并州を制圧し、翌五七七年には鄴を平定するのに加わり、さらに行軍総管として宇文憲に従って、稽胡帥劉没鐸と結んで河東に拠って反旗を翻していた天柱を破り、首三千級を斬った。かくのごとく、文武両官に就いたとはいえ、軍事において大いに活躍した。

宇文純も、文武両方の官を踏んだ。文官は、北周武帝代五七八年には雍州牧に任ぜられ、宣帝代五七八年に太傅

に遷った。武官は、武帝代五六一年から五六五年までの間に開府儀同三司を加えられ、五六五年に大将軍を拝し、ついで柱国に進み、五六八年に秦州総管に出、五七〇年に陝州総管に転じた。五七五年には前一軍総管となり、五七六年には上柱国に進み、并州総管を拝した。実戦は、北周武帝代五七一年に陝州総管として田弘を督して北斉の宜陽郡城など九城を攻め取り、五七五年には前一軍総管として東征軍に加わり、五七六年にも東征に参加し、前一軍の指揮官として歩兵一万を率いて千里径を守った。宇文純も、宇文倹と同様に文武両官に就いたとはいえ、軍事において大いに力を振るった。

宇文盛もまた、文武両方の官を経歴した。文官は、北周武帝代五七八年に大冢宰に任命され、宣帝代五七九年には大前疑となり、ついで太保に転じた。武官は、北周武帝代五七一年に柱国に就けられ、五七五年には後一軍総管となり、五七六年には上柱国に進み、五七七年に相州総管を拝した。実戦では、北周武帝代五七五年に東征軍に後一軍総管として参加し、翌五七六年に東征軍に再び加わり、北周軍が晋州城を攻めた際には、歩騎一万を率いて汾水関を守って并州の北斉軍との連絡を断ち切り、高顕城など数城を落とした。五七七年には、稽胡帥劉没鐸の反乱平定に従った。宇文盛も、宇文倹と同様に文武両官に就いたとはいえ、軍事において大いに力を振るった。

宇文達は、文武両官を経験した。文官は、北周武帝代五七二年以後に荊淮等十四州十防諸軍事・荊州刺史に出、五七九年には大右弼に任ぜられた。荊州刺史時代には、政績を挙げた。武官は、北周武帝代五六六年に大将軍・右宮伯を拝し、左宗衛に任ぜられ、五七二年に柱国を進み、五七五年には益州総管に転じ、五七五年か五七六年に右一軍総管となった。宣帝代五七八年に上柱国に進んだ。実戦では、五七五年か五七六年に右一軍総管として東征軍に加わった。[8] 宇文達は「性果決にして、騎射を善くす」とあり（『周書』一三宇文達伝）、武芸に優れていた。その一方で民政能力にも長けていた。

宇文陵・宇文泰の系統は、以上検討してきたことをまとめると、以下のようになろう。宇文陵・宇文泰の系統は、北魏孝明帝代に宇文泰の甥たちがはじめて学問を学び、東西両魏に分裂した後、宇文泰の子が本格的に学問を習った。宇文泰の子は、西魏・北周において官歴を刻んだ。かれらが就いた官は、文武両官である。文官は、京官と地方官とがみとめられる。京官は、前に述べたごとく、中書省官と尚書省郎官及び六官の中書省官と尚書省郎官に相当する官に就いたものはいない。就いたのは、太師・太傅・太保、大前疑・大右弼、大冢宰・小冢宰、大司空である。太師となったのは宇文招であり、太傅に就いたのは宇文純であり、太保に任ぜられたのは宇文盛であった。大前疑は宇文盛が任命され、大右弼は、宇文達が除せられた。大冢宰は宇文憲と宇文儉がなり、小冢宰は宇文憲が任ぜられ、大司空は宇文招が就いた。太師（正九命）・太傅（正九命）・太保（正九命）は三公であり、大前疑・大右弼は四輔であり、大冢宰（正七命）・小冢宰（正六命）は各々天官府の長官・次官であり、大司空（正七命）は冬官府の長官である。四輔の大前疑・大右弼は官品はないが、他はいずれも正六命以上であり、大前疑・大右弼も含めてすべて高位高官である。地方官は、雍州牧・行華州事・岐州刺史・蒲州刺史・荊州刺史・宜州刺史である。官品は、雍州牧は九命であり、他は九命・正八命・八命のいずれかである。[8] その任地をみると、雍州は首都長安を含む西魏の心臓部であり、華州・岐州・宜州は雍州に隣接して長安を護る位置にあった。蒲州は東魏・北斉の副都并州から繰り出してくる軍勢を防ぎ、逆に并州を攻略する橋頭堡となる要地であった。荊州は、東魏・北斉との係争地洛陽を窺う位置にあった。いずれも西魏・北周にとり、極めて重要な地であった。

他方、武官は、中央では大将軍（正九命）・柱国大将軍（正九命）・上柱国（正九命）に就いている。大将軍だけに就いたものは、いない。大将軍と柱国大将軍の両方に就いたのは、明帝・武帝・宇文憲・宇文儉である。柱国大将軍のみに就いたものは、宇文直である。柱国大将軍と上柱国の両方に就いたものは、宇文招・宇文盛である。

大将軍・柱国大将軍・上柱国のすべてに就いたのは、宇文迪・宇文純・宇文達である。大将軍・柱国大将軍・上柱国は、いずれも正九命の高級武官である。地方では益州総管・河陽総管・襄州総管・秦州総管・陝州総管・并州総管・相州総管である。益州総管に就いたのは、宇文憲・宇文招・宇文俭・宇文達の四人である。河陽総管に任命されたのは、宇文迪である。襄州総管に就いたのは、宇文直である。秦州総管・陝州総管・并州総管に任命されたのは、宇文純である。相州総管に除せられたのは、宇文盛である。宇文泰の子が赴いた益州・河陽・襄州・秦州・陝州・并州・相州は、いずれも要衝であった。益州は、関中に食糧を供給する巴蜀地方の中心であり、[10] 河陽は洛陽を目睫の距離に望む黄河北岸の地であり、洛陽攻防の争点となる所である。[11] 襄州は、北から長江へ南下して行く上の要衝襄陽を擁し、史上南北両勢力の衝突した地であった。秦州と陝州は各々関中盆地を西と東から守る位置にあり、并州と相州は各々北斉の副都と首都が置かれていた地域であった。益州・河陽・襄州・秦州・陝州・并州・相州はいずれも政治・経済・軍事上の要地である。州牧や州刺史として赴いた雍州・華州・岐州・蒲州・荊州・宜州も、政治・経済・軍事上の要地である。宇文泰の子は、北周の重要地点を軍事上抑える上で極めて大きな役割を果たした。

五七五年に北斉征服に向かった武帝の親征軍は、以下の通り構成された。その基幹部分は前後併せて六軍から編成され、その他に五軍が加わった。前一軍総管は宇文純、前二軍総管は司馬消難、前三軍総管は達奚震、後一軍総管は宇文盛、後二軍総管は侯莫陳瓊、後三軍総管は宇文招が各々任ぜられた。この他宇文憲が、前軍を統率した。さらに楊堅と薛迥が水軍を率い、侯莫陳芮・李穆・于翼が各々一軍を統帥した。

五七六年に北斉征服に向かった武帝の親征軍は、以下の通り構成された。武帝の直轄軍は、左右六軍から成り、四軍が別働部隊として動いた。右一軍総管は宇文盛、右二軍総管は宇文亮（宇文泰の兄宇文顥の孫）、右三軍総管

は楊堅、左一軍総管は宇文俊、左二軍総管は竇恭、左三軍総管は丘崇が各々任ぜられた。この他宇文憲と宇文純が、前軍を統率した。さらに達奚震・韓明・尹昇・辛韶・宇文招が各々一軍を統率した。宇文泰の子は、五七五年には一〇軍中三軍を率い、五七六年には一〇軍中五軍を率領し、東征において大きな役割を果たした。

宇文泰の子は学問を学び、文武両官に就くが、文官は中央・地方ともに正六命以上の高位高官に就いた。武官は、中央で正九命の高位高官に任ぜられ、地方では総管として当該地の軍事の総帥となった。文武両官に就いたとはいえ、各人の一生涯の行跡の中で、北斉を滅ぼした業績が大きな比重を占め、さらにその際に果たした役割が極めて大きかったことをみるならば、武人としての側面が強かったといえよう。宇文泰の子は学問を学び、文官として活躍し得る可能性を秘めていたと推察されるが、北斉・陳と鼎立し、なかでも北斉と華北の覇を競っていた北周の宗室として、軍事に深く関わり力を傾注することは、勢い免がれられなかった。

⑦宇文陵・宇文洛の系統

宇文陵・宇文洛の系統は、宇文泰の父宇文韜の弟に当る宇文阿頭の直系子孫である。宇文阿頭の子宇文仲は『周書』一〇に立伝されているが、学問の有無・軍事の才能については不明である。名前と追贈された官と封爵のみが伝わっている。宇文阿頭の子宇文仲は生前の官は記されていない。宇文仲の子宇文興は学問を学んでいない。宇文興ははじめ東魏に身を投じ、東魏軍に参加して沙苑に侵入して捕虜となった。東魏で就いた官は史乗に記されておらず、西魏・北周で踏んだ官歴が伝わっている。彼は、文武両方の官に就いた。文官は、京官と地方官に任ぜられた。地方官は西魏恭帝代五五五年に賢良に挙げられて、代郡丞に除せられ、ついで長隰県令に移り、北周武帝代五

六四年に涇州刺史となった。京官は、北周武帝代五六三年に宗師中大夫に除せられ、五六五年に大宗伯に任命された（『元和姓纂』六）。尚書省郎官及び六官中尚書省郎官に相当する官には就いてはいない。武官は、北周武帝代五六二年に使持節・驃騎大将軍・開府儀同三司・都督を拝した。宇文興の子宇文洛は、学問を学んでいない。官歴をみると、武官のみに就いている。北周武帝代五七二年に使持節・車騎大将軍・儀同三司に任ぜられた。宇文洛以後の子孫については、隋唐代において後述する。

⑧宇文虬の系統

宇文虬の系統は、父祖と子孫の名前が史書に記されておらず、史乗に名がみえるのは宇文虬唯一人である。宇文虬は、学問を学んではいない。北魏孝荘帝代から西魏代まで官途を歩んだ。その間就いた官は、文武両官である。文官はすべて地方官であり、京官には就いてはいない。西魏文帝代五四一年に漢陽郡太守に就き、五四五年には南秦州刺史に任ぜられ、五五二年に金州刺史に除せられた。武官は、北魏孝荘帝代五二八年から五三〇年までの間に征虜将軍に除せられ、都督を加えられた。その後安西将軍・直閤将軍・閤内都督を加えられた。北魏孝武帝代五三四年には、帳内都督となった。西魏文帝代五三八年以後に車騎将軍に進み、五四五年には車騎大将軍・儀同三司を加えられ、ついで驃騎大将軍・開府儀同三司に進み、廃帝代五五二年に大将軍に進んだ。実戦では、「少くして軍に従い、累りに戦功有り」とあるごとく（『周書』二九宇文虬伝）、対梁戦と対北斉戦で武勲をしばしば立てた。北魏孝武帝代五三三年には荊州刺史賀拔勝の部下大都督独孤信に従って梁の雍州城襄陽から程近い下溠戍（下迮戍）を攻略し、さらに欧陽城・鄭県城を平定し、非常に多くの俘虜を得た。また南陽郡城・広平郡城を攻めて郡太守一

人を捕えた。翌五三四年には、独孤信に従って東魏の弘農郡太守田八能を淅陽郡で破り、東魏軍が賀拔勝を駆逐して奪った荊州を攻め、東魏の荊州刺史辛纂を捕えて取り戻した。西魏文帝代五三七年に東魏の驍将竇泰の迎撃、弘農郡の奪還、沙苑の戦い、五三八年に河橋の戦闘、に各々従い、すべて軍功を挙げた。五四一年には独孤信に従って岷州刺史であった宕昌羌の梁定が起こした反乱を平定した。五五一年には、大将軍王雄に従って子午谷から出て、梁の北辺に位置する上津郡と魏興郡を制圧し、救援に駆けつけて来た梁の武陵王蕭紀の将楊乾運と漢中郡の白馬戍において戦い破った。上津郡と魏興郡には東梁州を置いたが、同年に東梁州で反乱が起きると、宇文虬は再び王雄に従って鎮圧に動いた。

宇文虬は、学問を学んでいなかった。文官に就いたとはいえ、京官ではなく、郡太守や州刺史といった地方長官であった。彼は地方長官であった時、例えば南秦州刺史時代には車騎大将軍・儀同三司を加えられ、ついで驃騎大将軍・開府儀同三司に進んだり、金州刺史時代には大将軍に就いたりしたごとく、武官を兼任し、軍事と関わった。その業績は、すべて武勲である。以上から考えて、宇文虬は生粋の武人として生涯を送ったといえよう。

⑨宇文伊與敦・宇文盛の系統

宇文伊與敦・宇文盛の系統は、学問を学んだものが一人も認められない。曾祖父宇文伊與敦・祖父宇文長寿・父宇文文孤は、いずれも沃野鎮軍主となった。少なくとも、曾祖父宇文伊與敦以来、武人の家系とみられる。

宇文盛は官歴をみると、文武両官を歴任した。文官は、西魏文帝代五三七年以後に馮翊郡太守・鹽州刺史を歴任し、北周武帝代五七〇年に大宗伯となり、五七三年に少師を授けられた。武官は、北魏孝武帝代に宇文泰の帳内と

なり、五三四年には威烈将軍を授かり、西魏文帝代五三七年には都督を兼ね、五三八年以後に都督・平遠将軍・歩兵校尉を授けられ、ついで帥都督・撫軍将軍を加えられ、大都督・車騎大将軍・儀同三司、驃騎大将軍・開府儀同三司を累遷し、北周孝閔帝代五五七年に大将軍を授けられ、涇州都督に除せられ、その後延州総管に転じ、柱国に進んだ。宣帝代五七八年には、上柱国を拝した。実戦は、北魏孝武帝代五三四年に宇文泰が賀拔岳を殺害した侯莫陳悅を撃ち破るのに従い、西魏文帝代五三七年に東魏の驍将竇泰を激撃し、弘農郡を奪還し、沙苑で戦うのに従った。北周武帝代五七一年には、前年に侵入して汾水の北岸華谷から龍門まで城を築いた北斉の斛律明月の軍を牽制するために、派遣された宇文憲の軍に加わり、汾州城の包囲に参加した。五七六年には、北周武帝の北斉征服軍の一員となり、一軍（歩騎一万）を率いて汾水関を守った（『周書』二九宇文盛伝）。

宇文盛は学問を習っておらず、文官を経験してはいるが、中書省官・尚書省郎官及び六官の中の中書省官・尚書省郎官に相当する官には就いてはいない。官歴中、武官のほうが多くを占めている。宇文泰の挙兵・対北斉戦に参加している。以上から考えて、宇文盛は武人とみなせよう。

宇文盛の弟宇文丘も、学問を学んではいない。彼が就いた官をみると、文武両官に任ぜられている。文官は、京官と地方官に就いた。地方官は、北周孝閔帝代五五七年以後に咸陽郡太守、汾州刺史、延綏丹三州三防諸軍事・延州刺史、涼甘瓜三州三防諸軍事・涼州刺史を歴任した。京官は、北周孝閔帝代五五七年以後に左宮伯に任命された。武官は、襄威将軍・都督から起家し、輔国将軍・大都督に任命され、北周孝閔帝代五五七年以後に車騎大将軍・儀同三司を拝し、その後驃騎大将軍・開府儀同三司を加えられ、ついで大将軍と柱国大将軍を経歴した。実戦については、参加した記録はない。官歴全体をみると、武官が大部分を占める。就いた文官も地方官が多く、延州刺史、涼州刺史であった時代には諸軍事を兼ね、左宮伯であった時には大将軍も兼ねた。文官であった時も、軍事に関わっ

た。学問を学んではいなかったこと、実戦で勲功を立てたことはないが、文武両官に就いていた時に一貫して軍事に関わっていたことから、武人として立っていたものとみられる。

宇文盛の子は宇文帰・宇文述・宇文静の三人がいる。彼らについては、隋唐代のところで後述する。宇文丘の子宇文隴は、名前がみえるのみで、官歴は記されていない。

以上から、宇文伊與敦・宇文盛の系統は、宇文伊與敦以来軍事に関与し続けた武人の家系であったとみられる。

⑩宇文莫豆干・宇文貴の系統

宇文莫豆干・宇文貴の系統は、宇文貴の祖父以上の世代の人物については、先祖が昌黎郡大棘県出身で、夏州に徙居したこと以外、名も含めて、その足跡が史書に全く記述がない。父の宇文莫豆干については、生前の行跡・官歴が一切不明である。ただ没後、北周武帝代五六一年から五六五年までの間に、宇文貴が勲功を挙げたので、柱国大将軍・少傅・夏州刺史・安平郡公を追贈された事実が記されているのみである。

宇文貴は、「少くして師に従い学を受く」とあることく（『周書』一九宇文貴伝）、学問を学んだ。学んだ時期は、官界に起家する前、北魏代においてであろう。官歴は、北魏孝明帝代から北周武帝代にかけて跡を印している。文武両官に就いている。文官は、京官と地方官に就いた。地方官は、北魏孝荘帝代五二九年以後に郢州刺史に除せられた。西魏文帝代に五三七年以後に夏州刺史・岐州刺史を歴任し、西魏廃帝代五五二年に岐州刺史となり、五五三年に大都督興西蓋等六州諸軍事・興州刺史を授けられ、ついで五五四年に都督益潼等六州諸軍事・益州刺史に除せられた。京官は、西魏文帝代五五〇年に中外府左長史に遷り、西魏廃帝代五五四年に小司徒を加えられた。北周孝

閔帝代五五七年には御正大夫を拝し、明帝代五五九年以後に大司空・小冢宰を歴遷し、武帝代五六四年に大司徒に任ぜられ、ついで太保になった。武官は、北魏孝明帝代五二四年に統軍となり、ついで武騎常侍に除せられ、北魏孝荘帝代五二八年には別将を加えられ、翌五二九年には都督に転じ、さらに征虜将軍を加えられた。その後武衛将軍・閤内大都督となった。西魏文帝代五三五年に右衛将軍に遷り、五三七年に車騎大将軍・儀同三司に進み、ついで驃騎大将軍・開府儀同三司に上がり、五五〇年には大将軍に進み、北周孝閔帝代五五七年には柱国大将軍に昇った。実戦では、北魏孝明帝代五二四年に破六汗拔陵が包囲する夏州から州刺史源子雍を救い出して送還し、帰路で叱干麒麟・薛崇礼の率いる反乱勢力を撃破した。五二七年には源子雍の葛栄討伐に従い、陽平並びに鄴において戦った。北魏孝荘帝代五二八年には、爾朱栄に従って葛栄を滏口（相州）で滅ぼしその支配下の冀・定・滄・瀛・殷五州を収めた。翌五二九年には、元天穆・高歓に従って邢杲を済南で破り降し、爾朱栄に従って梁から援軍を得て入洛した元顥を相手に洛陽の河橋で力戦して功績を立てた。北魏孝武帝代五三四年には武衛将軍・閤内大都督として孝武帝を護衛しながら西遷に随従した。西魏文帝代五三七年には独孤信に従って東魏支配下の旧都洛陽に入城した。東魏の潁川郡長史賀若統が西魏に降った後、東魏が失地回復が目的で送ってきた尭雄・趙育・是云宝の率いる軍を潁川郡で迎え、撃退した。五五〇年には渭州周辺で起きた宕昌羌内部の紛争に端を発した反乱を豆盧寧・史寧とともに制圧し、岷州が置かれた。廃帝代五五四年には、前年に梁の四川を攻略した尉遲迥に替わって益州に駐屯し、隆州の反乱を抑えた。明帝代五五九年には涼州に侵入してきた吐谷渾を賀蘭祥とともに討った。

宇文貴は若い時分に学問を学び、北魏孝明帝代から北周武帝代にかけて文武両官に就いた。文官では、学問を知っていることが任官の条件となったとおもわれる、詔勅を総べる御正大夫に就いており、若い時に習った学問が役立ったものと考えられる。だが彼自身は「男児は当に剣を提げて馬を汗して以って公侯を取るべし。何ぞ能く先生の如

く博士と為らんや。」（『周書』一九宇文貴伝）と発言したごとく、学問により身を立てるよりもむしろ戦陣で武勲を挙げることを望んだ。事実、上でみたように北魏末の反乱諸勢力との戦い、東魏との争覇戦、宕昌羌の反乱の制圧、隆州の反乱鎮圧、吐谷渾遠征に八面六臂の働き振りをみせた。その本領は、武人として活動した点にあったとみられる。

宇文貴の子は、宇文善・宇文忻・宇文愷の三人である。宇文善は、学問を学んではいない。「弘厚にして武芸有り」とあるごとく（『隋書』四〇宇文善伝）、武芸に通じていた。北周において文武両官を歴任した。文官は、京官と地方官の両方に就いた。地方官は洛州刺史に任命された。京官は、洛州刺史を経て宣帝代五七九年に大宗伯となった。武官は、開府儀同三司と大将軍を経て、武帝代五七一年に柱国を就き、静帝代五八〇年に上柱国に昇った（『周書』一九宇文善伝）。実戦については、何ら勲功は記されてはいない。

宇文忻も学問を習わなかった。その官歴は、主として北周代、そして隋代に印された。就いた官は、すべて武官である。まず北周とおもわれる時期に儀同三司を拝し、ついで開府儀同三司と驃騎将軍を加えられ、武帝代五七七年には大将軍に進み、五七八年には柱国大将軍・豫州総管となり、静帝代五八〇年には行軍総管に任ぜられ、隋文帝代五八五年に右領軍大将軍に任命された。実戦では北周武帝代に西魏文帝代五四二年以来韋孝寛がたびたび赴いて守っていた、河東における最前線の要衝玉壁（勲州）に派遣され、しばしば戦功を挙げた。五七七年には武帝の親征に従い、晋州と并州を抜いた。五七八年には王軌に従って陳将呉明徹を呂梁（彭城郡）で撃ち破り、静帝代五八〇年に尉遅迥が相州で反旗を翻したのを、行軍総管として行軍元帥韋孝寛に従い鎮圧した。

宇文忻は学問を習わなかったが、「能く左右に馳射し、驍捷なること飛ぶが如し」とあり（『隋書』四〇宇文忻伝）、武芸に優れていた。また「兵法を妙解し、戎を馭して斉整たり」とあり（『隋書』四〇宇文忻伝）、軍を動かす用兵術

にも通じていた。以上みたように、宇文忻は学問を学ばず、軍事に明るく、専ら武官のみに就き、赫々たる武勲を立てたことから、武人として生きたといえよう。

宇文愷は、「独り学を好み、博く書記を覧、解く文を属り、技芸多し」とあるごとく(『隋書』六八宇文愷伝)、学問を学び好んだ。官歴は、北周と隋代に刻んだ。文武両官に就いたが、武官よりも文官のほうに多く就いた。武官は、北周代に千牛にまず任ぜられ、その後儀同三司に遷り、隋文帝代に儀同三司を再び授けられ、煬帝代に開府に進んだ。文官は、隋代に京官と地方官に任命された。地方官は、隋文帝代に莱州刺史に任命された。京官は、隋文帝代に営宗廟副監・太子左庶子を拝し、五八二年には営新都副監を領し、その後検校将作大匠となり、仁寿宮監を拝し、ついで将作少監となった。煬帝代には六〇七年に営東都副監に任命され、ついで将作少監に遷り、さらに六〇八年には工部尚書を拝した。

宇文愷は隋代に入ってから、土木方面にその才能を開花させた。彼は、隋が起こした大規模な土木工事の多くに総監督あるいは副監督として携わった。彼が関わった土木事業は、隋の宗室楊氏の宗廟・大興城・広通渠・仁寿宮・太陵(隋文帝と文献皇后独孤氏の合葬墓)・東京洛陽城・長城(榆谷以東)・観風行殿の建設であった。大興城建設の際には、高熲が総監督であったが、すべての計画は副監督であった宇文愷が立てた(『隋書』六八宇文愷伝)。他の土木工事においても、計画立案に当ったものとおもわれる。彼が土木工事の計画立案ができたのは、学問を知っていたからであろう。西晋の永嘉の乱以来、明堂が廃絶したのを復興させようとした時に、議論が起きた。宇文愷も『明堂議表』を上奏し、議論の輪の中に加わった。そこでは『淮南子』・『尚書』・『周礼』・『尸子』・『礼記』・『呂氏春秋』などを引きながら論を展開している。このことは、彼が学問を基に土木工事の計画を立案したことを裏書するであろう。彼は『東都図記』二〇巻・『明堂図議』二巻・『釈疑』一巻を著わし、世に流布した。

この中『東都図記』と『明堂図議』は、建築関係の著述であろう。

宇文愷は、「渡遼の功を以って、位を金紫光禄大夫に進む」とあり（『隋書』六八宇文愷伝）、高句麗遠征で何らかの勲功を立てたとおもわれる。ただそれ以外には、武勲を挙げた様子はない。彼の場合、学問を学びそれを土木建築に活用し、武人というよりむしろ文人として生きたといえよう。

宇文善・宇文忻・宇文愷三兄弟の子は、宇文愷の子宇文儒童と宇文温の二名のみが名が伝わっている。ただ二人とも行跡は記されておらず、各々游騎尉、起部承務郎に就いたことが書かれているだけである

宇文莫豆干・宇文貴の系統は、北魏代・東西両魏・北斉・北周において、「家世、武将なり」とあるごとく（『隋書』六八宇文愷伝）、武人色の極めて濃い家だったといえる。隋代に入ると、宇文愷のように文人として生きる人物も出た。

2　隋唐代

宇文氏は、西魏・北周の中核を構成していた宇文陵・宇文泰の系統は、周隋革命時にほとんど殺されて絶えた。宇文氏で隋唐代にその存在が確かめられるのは、五系統である。それは、①宇文伊與敦・宇文盛の系統（北朝時代の⑨系統）、②宇文直力覲・宇文弢の系統（北朝時代の⑤系統）、③宇文求男・宇文金殿の系統（北朝時代の④系統）、④宇文陵・宇文洛の系統（北朝時代の⑦系統）、⑤宇文籍・宇文臨の系統である。

①宇文伊與敦・宇文盛の系統

宇文伊與敦・宇文盛の系統は、宇文盛の子に宇文帰・宇文述・宇文静三兄弟がいる。宇文帰と宇文静の二人とその子孫は後でみるとして、ここでは先ず宇文述及びその子宇文化及・宇文士及・宇文智及三兄弟からみてみよう。

宇文述は、学問を学んではおらず、北周代から隋代までの間官界を歩んだ。その官歴をみると、すべて武官である。北周武帝代に開府より起家し、五七二年に左宮伯に任ぜられ、その後英果中大夫に累遷した。静帝代五八〇年には行軍総管となり、ついで上柱国大将軍を拝した。隋文帝代五八一年には右衛大将軍に任命され、五八九年には再度行軍総管となり、ついで安州総管に任ぜられ、五九〇年には寿州刺史総管に就けられた。六〇二年には左衛率に就けられた。煬帝代六〇五年には左衛大将軍に任命され、六〇七年には開府儀同三司を加えられた。六一二年には扶餘軍道将となり、一旦免官となるが、翌六一三年には再び左衛大将軍に任ぜられた。実戦では、北周静帝代五八〇年に行軍総管として歩騎三千を率いて、行軍元帥韋孝寛に従って尉遲迥の反乱討伐に向かい、平定した。隋文帝代五八九年には行軍総管として三万の兵を率いて、晋王楊広（のちの煬帝）に従い、陳を征服した。煬帝代六〇八年に曼頭・赤水で吐谷渾を破り、翌六〇九年には張掖を侵した吐谷渾を撃った。六一二年には扶餘軍道将として、高句麗遠征に参加した。この時には平壌城の西方薩水で大敗を喫し、三〇万五千人の兵士中、二千七百人を残すのみとなった。翌六一三年に再び高句麗遠征に参加し、楊義臣と平壌に派遣されるが、黎陽で漕運を掌っていた礼部尚書楊玄感が反旗を翻すと、取って返して衛玄・来護児・屈突通らとともに制圧した。

宇文述は煬帝から寵愛され、六一〇年以後蘇威とともに選挙を掌り、朝政に参与したが、学問を学ばず、「少くして驍鋭にして、弓馬に便る」とあるごとく（『隋書』六一宇文述伝）、武芸に熟達し、武官のみに就き、その行跡においても軍事活動が大きな比重を占めるとみられることから、武人として生涯を送ったといえよう。

宇文述の子宇文化及・宇文士及・宇文智及三兄弟の中、宇文化及・宇文智及の二人は、隋煬帝代六一八年に司馬

徳戡・司馬元礼・裴虔通らとともに江都で煬帝を弑逆し、その後北上し、六一九年に聊城において竇建徳に敗れて斃れた。宇文士及は、煬帝の娘南陽公主を妻としていたが故に煬帝の弑逆の謀議に加えられず、唐代にまで生き延びた。宇文化及と宇文智及の二人から、まずみてみよう。

宇文述の子宇文化及は、学問を学んではいない。宇文化及は、隋代に文武両官を経験した。文官は、隋文帝代六〇二年以後に太子僕に任ぜられ、煬帝代六〇四年に太僕少卿を拝し、六一八年弑逆直前に反逆者たちから丞相に祭り上げられた。武官は、煬帝代六一六年に右屯衛将軍となった（『隋書』八五宇文化及伝）。実戦には、参加していない。

宇文智及も、学問を学んではいない。隋代に文武両官に就いた。隋煬帝代六一六年に将作少監を授けられ、弑逆後尚書左僕射となり、十二衛大将軍を領した（『隋書』八五宇文智及伝）。実戦には、参加していない。

宇文士及も学問を学んではいない。隋煬帝代から唐太宗代までの間に、文武両官を歴任した。文官は、隋煬帝代六〇五年から六一七年までの間に尚輦奉御・鴻臚少卿を歴任し、六一八年に煬帝弑逆後内史令に署名せられた。唐高祖代六一九年宇文士及と宇文智及が亡くなった後、済北郡より来降した。唐高祖代六二一年以後に中書侍郎に遷り、六二五年には権検校侍中となり太子詹事を兼ねた。太宗代六二六年には中書令を拝し、ついで殿中監・蒲州刺史を歴任し、再び殿中監となった。武官は、唐高祖代六一九年に上儀同を授けられ、六二〇年には秦王府驃騎将軍に遷り、その後検校涼州都督・右衛大将軍を歴任した。実戦では、唐高祖代李世民（のちの太宗）に従って六二〇年に宋金剛を平定し、六二一年には竇建徳と王世充を撃ち滅ぼした（『旧唐書』六三宇文士及伝、『新唐書』一〇〇宇文士及伝）。

宇文化及・宇文智及二兄弟は、文武両官に就いているものの、学問を学んではおらず、中書省官と尚書省郎官は

経験していない。少なくとも、文人とはいえないであろう。実戦に参加していないが、武官に就いており、各々武人として立っていたと推察される。

宇文士及は、文武両官に就き、しかも文官中中書侍郎・中書令といった中書省官に任命されており、[12]学問を学んだという記述は史書にみえないが、学問に対して理解があったと推測される。だが武官に就き、隋末唐初に簇生した反乱諸勢力中最も手強かった竇建徳と王世充と戦っており、その本領は軍事にあったかとおもわれる。宇文化及・宇文士及・宇文智及三兄弟の子孫は、宇文士及の子に新城県公或いは封城県公に就いた、名前の不明なものがいる以外、わからない（『旧唐書』六三宇文士及伝、『新唐書』一〇〇宇文士及伝）。

宇文述の兄宇文帰は『隋書』にも新旧両唐書にも伝はなく、学問の有無や軍事の能力は確認できない。ただ名のみ、確かめられる。宇文帰の子孫も『隋書』にも新旧両唐書にも伝はなく、学問の有無や軍事の能力は確認できない。ただ就いた官は確認できる。宇文帰の子宇文定及は唐代に徳州刺史に任命され、宇文定及の子宇文規は光禄少卿に就き、宇文規の子小宇文顒は無官であり、宇文顒の子宇文実は好畤県令に除せられ、宇文実の弟宇文宿は均州刺史に任ぜられた（『新唐書』七一下宰相世系表一下、『元和姓纂』六）。少なくとも、武官には就任していない。

宇文述の弟宇文静も『隋書』にも新旧両唐書にも伝はなく、学問の有無や軍事の能力は確認できない。ただ名のみ、確かめられる。宇文静の子宇文福及も同様である。宇文福及の子は史書に名がみえないが、宇文福及の孫宇文全志は工部員外郎に就き、その甥宇文順は虞部員外郎に任命された（『新唐書』七一下宰相世系表一下、『元和姓纂』六）。任命された時期は、いずれも唐代であろう。

以上から、宇文伊興敦・宇文盛の系統は、宇文述及びその子宇文化及・宇文士及・宇文智及三兄弟まで、隋から唐初まで、学問を学んでおらず、軍事との関わりを完全に放棄しておらず、おそらく武人の家として存続していた

とおもわれる。宇文述の子孫は宇文化及・宇文士及・宇文智及三兄弟より下の世代は不明だが、宇文述の弟宇文静の子孫で唐代に宇文全志・宇文順のように尚書省郎官に就いたものがいたことから、[13] 宇文伊與敦・宇文盛の系統は、唐代に実務能力を以って立つ文人官僚・文人士大夫に転じていたかもしれない。

②宇文直力覲・宇文弦の系統

宇文弦は、隋代にも文武両官を歴任した。文官は、京官と地方官の両方に任ぜられた。京官は、文帝代五八一年に尚書右丞に任ぜられ、ついで尚書左丞に遷り、五八三年に太僕少卿に除せられ、吏部侍郎に転じ、五八九年に刑部尚書に抜擢された。煬帝代六〇五年に刑部尚書に任命され、その後再度刑部尚書を拝し、六〇七年に礼部尚書に転じた。地方官は、煬帝代六〇五年から六〇七年までの間に泉州刺史に除せられた。武官は、文帝代五八三年に行軍司馬となり、五八八年には行軍総管を領し、ついで開府を加えられ、五八九年には太子左右虞候率に任ぜられた。五九八年には元帥漢王府司馬を授けられ、ついで行軍総管を領した。五九九年に朔州総管に任ぜられ、その後六〇五年までの間に代州総管・呉州総管を歴任した。実戦では、文帝代五八三年に行軍司馬として甘州を侵した突厥を、行軍元帥寶栄定に従い涼州より出て撃破した。五八八年には、行軍総管として陳の平定に参加し、楊素配下の劉仁恩が長江中流域の岐亭（夷陵郡）で永安郡から東下してきた隋の水軍の行く手を阻んでいた陳将呂忠肅を排除するのを、策を授けて助けた。また五九八年には、高句麗遠征に参加した。

宇文弦は、先にみたように、学問を学び、『尚書』と『孝経』に注を加えた。文武両官に就き、とくに文官では北周代に中書省官で詔勅を起草する内史都上士（中書舎人に相当）に就き、学才を発揮したものとおもわれる。ま

た隋代には尚書省の文書行政の要を握る尚書左右丞に任命されており、実務能力を備えていたものとおもわれる。実戦でも、北周代には対北斉戦、対突厥戦、隋代には対突厥戦、陳征服戦で活躍しており、軍事的才能があったことは明らかであろう。并州の治所が置かれていた晋陽は、重要地点であったので、そこを治める并州総管は必ず親王を任命し、その属僚である長史・司馬は優れた人材を選んだ。五九三年に并州総管漢王楊諒の長史王韶が死去すると、替わって長史に選ばれた。総管府長史は、軍民両政を掌るのが、役割である。[13] かれが長史に任用されたのは、文武両方の才能を兼備していたからである。次に宇文弢の子孫をみてみよう。

宇文弢の子は、その存在が認められるのは、新旧両唐書に伝がなく、『新唐書』七一下宰相世系表一下に名がみえる、宇文倹・宇文瑗・宇文紹の三人である。三人中、宇文瑗は就いた官が記されていない。宇文倹・宇文紹の二人は、各々九隴令、水部員外郎に就いた（『新唐書』七一下宰相世系表一下）。二人とも武官に就いておらず、実戦経験については、わからない。宇文倹・宇文瑗・宇文紹三兄弟の子は、宇文倹の子宇文節のみ認められる。

宇文節は、官歴をみると、文官に就いたことのみ確認できる。武官に任命された事実は見られない。唐代に吏部員外郎（『唐尚書省郎官石柱題名考』四）・吏部郎中（同三）・司勲郎中（同七）を歴任した。太宗代六二七年から六四九年までの間に尚書右丞となり、高宗代六五〇年には黄門侍郎・同中書門下三品に累遷し、六五二年には侍中に任命された。

彼は学問を学んだことは明記されていないが、「法令を明習し、幹局を以って称せらる」（『旧唐書』一〇五宇文節伝）とあり、実務能力を備え、「法令に明るし」（『新唐書』一三四宇文節伝）とあるごとく、法令に通じていたことから、あるいは学問も習っていたものとおもわれる。武官に就いておらず、実戦にも参加していないことから、実務能力を振るう文人官僚として立っていたものとみることができる。

宇文節の子は、宇文嶠のみが史書に名がみえる。宇文嶠は、学問を学んだことは確認できない。官歴をみると、武官に就いてはおらず、文官の莱州長史となったことがわかるのみである（『旧唐書』一〇五宇文節伝・『新唐書』一三四宇文節伝）。実戦経験も記されていない。

宇文嶠の子宇文融は、学問を学んだことは明記されていないが、「明辯にして、吏幹あり」（『旧唐書』一〇五宇文融伝）・「明辯にして、吏治に長ず」（『新唐書』一三四宇文節伝）とあり、実務能力があった。唐玄宗代には、周知の如く、括戸政策を提議し、自ら遂行した。その官歴は、武官には就いてはおらず、文官のみに任ぜられた。文官は、京官と地方官に就いた。地方官は、唐玄宗代七一三年に富平県主簿となり、七二七年に魏州刺史に左遷され、ついで汴州刺史に転任し、その後汝州刺史となった。京官は、唐玄宗代七一三年以後に監察御史となり、兵部員外郎に遷って侍御史を兼ね、その後御史中丞に抜擢され、七二八年に鴻臚卿と戸部侍郎を兼任し、七二九年に黄門侍郎に遷り、宰相の同中書門下平章事を兼ねた。実戦での経験はない。宇文融は、武官に就いておらず実戦経験もなく専ら文官に就き、尚書省郎官である兵部員外郎に就いていることから、実務に長けた文人官僚として生きたといえよう。

宇文融の子は、宇文寛・宇文寧・宇文審・宇文宣の四人である。四人中、宇文審以外の三人は新旧両唐書に伝がない。宇文審も学問を学んだことは明記されていないが、唐玄宗代に科挙の進士科に登第しており（『新唐書』一三四宇文審伝）、学問を学んだことは確かである。官歴をみると、武官には就いてはおらず、文官のみに任官した。文官は、京官と地方官に就いた。就いた地方官は、永州刺史と和州刺史である。京官は、大理評事と戸部員外郎（『唐尚書省郎官石柱題名考』一二）である。実戦に参加はしていない。以上から、宇文審は文人官僚として官界に立っていたとみられる。

新旧両唐書に立伝されていない、宇文寛・宇文寧・宇文宣の三人の中、宇文寛は学問を習ったことは明記されていない。官歴は、文官で京官である戸部員外郎に就いたことのみが明らかである（『元和姓纂』六）。実戦経験の有無は、確認できない。文人官僚であったかとおもわれる。

宇文寛・宇文寧・宇文審・宇文宣四兄弟の子は、宇文寛の子宇文炫のみ、その存在が認められる。[15] 宇文炫は、新旧両唐書に伝がなく、『新唐書』七一下宰相世系表一下と『元和姓纂』六にその名と就いた官が記されている。宇文炫も学問を習ったことは明記されていない。官歴は、文官で京官である刑部郎中に就いたことのみが判明している（『元和姓纂』六・『新唐書』七一下宰相世系表一下）。実戦経験の有無は、確認できない。尚書省郎官である刑部郎中に任ぜられたことから、宇文炫もまた文人官僚であったかとおもわれる。

宇文直力覲・宇文弢の系統で最初に学問を学んだ宇文弢の子孫の科挙合格者や尚書省郎官経験者を、宇文弢を起点にその世代順に整理すると、宇文紹（子）・宇文節（孫）・宇文融（玄孫）・宇文審（五世孫）・宇文寛（五世孫）・宇文炫（六世孫）である。曾孫の代を除いて、科挙合格者や尚書省郎官経験者を出した。尚書省郎官経験者も学問を学んだと考えられる。とすると、曾孫の代以外、宇文弢から宇文炫まで六世代に亘って学問を学び、科挙合格者や尚書省郎官経験者を輩出したと推察される。宇文紹以後の世代で武官に就いたものも実戦に参加したものも認められないことから、宇文直力覲・宇文弢の系統は宇文紹以後文人官僚・文人士大夫と化したとみられる。

③宇文求男・宇文金殿の系統

宇文求男・宇文金殿の系統では、宇文神挙・宇文神慶兄弟の子孫について、学問や軍事の才能に関して史書に全

く叙述がない。官歴については、簡単に記されているのみである

宇文神挙の子は、宇文同と宇文誼だけが史書に名がみえる。宇文同について史乗にある記載は、儀同大将軍に至ったことのみである。任官の時期は、明記されていない。北周代か隋代に任命されたとおもわれる。それ以外に彼の学問の有無や軍事の才能・官歴については記述がない（『周書』四〇宇文同伝）。宇文誼は、無官である。彼も学問の有無や軍事の才能については記述がない。

宇文神慶の子は、宇文静礼だけが史書に認められる。宇文静礼は学問の有無や軍事の才能については史書に記されていないが、その簡単に記されている官歴によると、隋代に太子千牛備身となり、ついで儀同を授けられ、後に熊州刺史に任命された（『隋書』五〇宇文静礼伝）。

宇文同の子孫については、全くわからない。宇文誼の子孫については、後述する。宇文静礼の子は、宇文協と宇文皛の二人である。この二人も学問の有無や軍事の才能について、史書に記されていない。官歴は、記されている。

宇文協は、隋代に武賁郎将と右翊衛将軍を歴任した（『隋書』五〇宇文協伝）。宇文皛は隋代に千牛左右に任命された（『隋書』五〇宇文皛伝）。宇文協と宇文皛の二人の子孫は、不明である。

宇文誼の子孫を除く、宇文神挙・宇文神慶兄弟の子孫は、官歴をみると、中書省官や尚書省郎官は経験しておらず、任官されているのは大部分が武官である。したがって、簡単に記された官歴であるが、それを基に判断すると、いずれも隋代に武人として立っていたものとおもわれる。

宇文誼の子孫は、『隋書』並びに新旧両唐書に立伝されていない。学問の有無や軍事の才能について、史書に記されていない。ただ宇文誼の子宇文珽と宇文珽の子宇文敞がその名と就いた官が史書にみえる。宇文敞の子孫については、不明である。宇文誼の子宇文珽は職方員外郎に任命され（『元和姓纂』六）、宇文珽の子宇文敞は戸部郎中

に就いた（『元和姓纂』六）。彼らの任官時期は記されていないが、唐代であろう。宇文珽は、宇文求男・宇文金殿の系統ではじめて尚書省郎官に就いた。学問の有無については記述がなく不明であり、宇文敞の子孫については史書にその存在が認められないが、宇文求男・宇文金殿の系統は宇文珽と宇文敞の代以降、実務能力を振るう文人官僚・文人士大夫として立つようになった可能性がある。

④宇文陵・宇文洛の系統

宇文興の子宇文洛は、『周書』一〇に伝が立てられているが、隋代における官歴は、全く不明である。ただ隋代に北周の宗室宇文泰の直系の子孫が根絶やしに遭った後、傍系ではあるが、血を引いていたので、隋文帝代五八一年に宇文洛が介国公に封ぜられたことがわかっているだけである。（『周書』一〇宇文洛伝）。

宇文洛の子孫は、新旧両唐書に伝が立てられていない。その多くは、学問の有無・軍事の才能が確認できない。宇文洛の子宇文裕、宇文裕の子宇文延、宇文延の子宇文離惑、宇文離惑の曾孫宇文庭立は、無官であり、介国公を襲ったことが明記されている（『新唐書』七二下宰相世系表一下）。その多くは、唐代に介国公を襲ったものであろう。

宇文庭立の子宇文邈は、唐代宗代七六七年に科挙の進士科に登第し（『登科記考』一〇）、その後左司郎中を経験し（『唐尚書省郎官石柱題名考』一）、徳宗代七九七年の時点で御史中丞であった（『旧唐書』一五八鄭餘慶伝・『新唐書』一六四鄭餘慶伝）。

宇文邈の子宇文鼎は、武官には任ぜられてはおらず、文官にのみ就いた。文官は、京官と地方官に就いた。地方

官は、唐文宗代に華州刺史に任ぜられた（『旧唐書』一六三盧弘正伝・『新唐書』一七七盧弘正伝）。京官は唐文宗代にまず吏部郎中に就き、八二九年に御史中丞に任命され（『旧唐書』一七上文宗本紀上）、その後刑部侍郎を兼ね、八三二年には戸部侍郎・判度支に任命された（『旧唐書』一七下文宗本紀下）。その他、左司員外郎（『唐尚書省郎官石柱題名考』二）・吏部員外郎（同四）・倉部員外郎（同一八）・吏部郎中（同三）を歴任した。

宇文邈は科挙に合格し、宇文邈と宇文鼎が父子揃って尚書省郎官に就いているところから、いずれも実務に携わる文人官僚・文人士大夫になっていたと推察される。

⑤宇文籍・宇文臨の系統

宇文籍・宇文臨の系統は、北朝で存在が認められる宇文氏のどの系統に繋がるかは不明であるが、一応一瞥しておこう。宇文籍は、「少くして学を好み、尤も『春秋』に通ず」・「性は簡澹寡合にして、経史を玩ぶに耽り、著述に精し」（『旧唐書』一六〇宇文籍伝）とあり、さらに科挙の進士科に及第し（『旧唐書』一六〇宇文籍伝）、『順宗実録』・『憲宗実録』の編纂に加わっており、学才のあったことは確かであろう。官歴をみると、唐憲宗代以後に監察御史・侍御史・駕部員外郎・史館修撰・知制誥・庫部郎中を歴任している。軍事には、全く関与していない。学才を以って仕える文人官僚・文人士大夫として立っていたものとおもわれる。

宇文籍の子宇文臨は、唐宣帝代八四七年に進士科に合格した（『旧唐書』一六〇宇文臨伝）。軍事に関わった痕跡は、みられない。官歴については、史書に全く記されていないが、科挙に受かっている点から、父の宇文籍同様学才を以って奉仕する文人官僚・文人士大夫として立っていたものとおもわれる。

おわりに

宇文氏は元来匈奴に属していたが、鮮卑を構成しその軍事力の一翼を担うようになった。北魏が孝文帝代四九三年に洛陽へ遷都する以前は、首都平城や武川鎮・夏州にいた。四九三年に洛陽へ遷都した後は、洛陽と武川鎮・夏州に住んだ。北魏代に洛陽遷都に随従した五系統の中で、①宇文活撥・宇文福の系統や⑤宇文直力覲・宇文弢の系統のように学問を学ばなかった系統があった一方、②宇文阿生・宇文忠之の系統、③宇文豆頽・宇文麒麟の系統、④宇文求男・宇文金殿の系統のように、学問を習ったものを擁する系統もあった。

洛陽遷都後に武川鎮・夏州に居続けた五系統中、北魏代に学問を学んだものが出たのは、⑥宇文陵・宇文泰の系統と⑩宇文莫豆干・宇文貴の系統である。北魏が東西に分裂した後、西魏・北周において学問を学んだものが認められるのが、③宇文豆頽・宇文麒麟の系統、④宇文求男・宇文金殿の系統、⑤宇文直力覲・宇文弢の系統、⑥宇文陵・宇文泰の系統である。⑥宇文陵・宇文泰の系統は北魏代に学問を学ぶものが認められたが、西魏において儒者を招いて他の三系統よりも本格的に学問を学んだ。

軍事との関わりをみると、北魏代に洛陽に移った五系統の中、明らかに文人といえる宇文忠之を生んだ②宇文阿生・宇文忠之の系統を除いて、学問を学んだものが認められない①宇文活撥・宇文福の系統はもとより、学問を学んだものがいた③宇文豆頽・宇文麒麟の系統と④宇文求男・宇文金殿の系統も北魏代に軍事から手を切ることはなかった。この三系統中、③宇文豆頽・宇文麒麟の系統と④宇文求男・宇文金殿の系統は、西魏・北周において引続き軍事に関与した。北魏代に洛陽遷都後も武川鎮・夏州に居続けた五系統中、その官歴や行跡が確認できない⑦宇

文陵・宇文洛の系統を除いた四系統は、北魏代に五系統中最も早く学問を学び始めて西魏において最も熱心に学問を学んだ⑥宇文陵・宇文泰の系統、並びに北魏代に学問を学んでいたものがいた⑩宇文莫豆干・宇文貴の系統も含めて、北魏・西魏・北周において軍事から手を引くことはなかった。北魏末の動乱を経て、北魏が東西に分裂した後、分散していた宇文氏の大部分は洛陽への遷都後も武川鎮に居続けた⑥宇文陵・宇文泰の系統を中軸に西魏・北周に結集した。西魏・北周において樹てられた軍事体制を支えた武川鎮軍閥の頂点に立ったのが、[16] ⑥宇文陵・宇文泰の系統であった。⑥宇文陵・宇文泰の系統は、西魏の実力者宇文泰の直系にして北周の宗室であり、東魏・北斉と対峙している以上、軍事活動の中心であることは免れられない。武川鎮出身で⑧宇文虬の系統である宇文虬と⑨宇文伊與敦・宇文盛に属する宇文盛はもとより、洛陽出身で近衛軍の指揮官として洛陽にいた、宇文泰の遠縁に当る、③宇文豆頽・宇文麒麟の系統に属する宇文深と、④宇文求男・宇文金殿の系統の宇文顕和、⑨宇文伊與敦・宇文盛の系統に属する宇文盛、夏州出身で近衛軍の指揮官として洛陽にいた、⑩宇文莫豆干・宇文貴の系統に属する宇文貴も孝武帝が洛陽から入関するのに従ってきて、西魏・北周の軍事体制の一翼を担った。近衛軍の指揮官であった彼らが宇文泰と同族であったことは、孝武帝が関中の宇文泰のもとに身を寄せるのを促すことにもなったであろう。

宇文氏で隋唐代にその存在が確かめられるのは、五系統である。それは、①宇文伊與敦・宇文盛の系統（北朝時代の⑨系統）、②宇文直力覲・宇文弢の系統（北朝時代の⑤系統）、③宇文求男・宇文金殿の系統（北朝時代の④系統）、④宇文陵・宇文洛の系統（北朝時代の⑦系統）、⑤宇文籍・宇文臨の系統である。

隋代に学問を学んでおらず軍事に関わっていたのが、①宇文伊與敦・宇文盛の系統と③宇文求男・宇文金殿の系

統である。隋以前に学問を学んだものが隋代に軍事に関わっていたのが、②宇文直力覬・宇文弢の系統である。③宇文求男・宇文金殿の系統、④宇文阿頭・宇文洛の系統、⑤宇文籍・宇文臨の系統は、隋代における様子はよくわからない。

唐代において学問を学んだことは直接確認できないが、尚書省郎官を出し、唐初は軍事に関わるが、後に軍事から手を引き、実務能力を振るう文人官僚・文人士大夫の家と化したとみられるのが、①宇文伊興敦・宇文盛の系統である。唐代において学問を学んだことは直接確認できないが、科挙合格者や尚書省郎官を出し、軍事に関わらず、実務能力を以って立つ文人官僚・文人士大夫の家と化したとみられるのが、②宇文直力覬・宇文弢の系統である。

隋代の状況は確認できないが、唐代に科挙合格者と尚書省郎官を出し、軍事に関わらず、実務能力を以って立つ文人官僚・文人士大夫の家と化したとみられるのが、④宇文陵・宇文洛の系統と⑤宇文籍・宇文臨の系統である。

唐代にその存在が認められる宇文氏の五系統をみる限り、宇文氏は総じて唐代に軍事から離れ、学問や実務能力により立つ文人士大夫・文人官僚の家に転じたとおもわれる。

宇文氏が結集した西魏・北周に再び目を転ずると、宇文泰が漢族士大夫の蘇綽と盧辯が『周礼』に基づいて作った六官制度を施行し、漢文化を尊重・採用する態度を示した。その一方で、虜姓を復活・施与し、[17] 祭祀や衣服の上で胡俗を守り、胡語（鮮卑語）を話すなど、[18] 胡漢文化が並存していた。学問を学び、自ら講筵を開いた北周武帝が胡語（鮮卑語）を話した事実は、かかる状況をよく物語っている（『隋書』四二李徳林伝）。但だ隋唐代に至って胡語（鮮卑語）を話したものは、宇文氏中に見出すことはできない。唐文化の中に、胡族系文化が流入したことは否定できない。[19] 唐代において、宇文氏は胡漢複合文化の中に深く浸っていたものと想像される。だが少なくとも言語に関しては、胡語（鮮卑語）を放棄し、漢語を使用していたものとみられる。おそらく意識の上でも、自らを漢族

と位置付けていたものと推察される。

注

(1) 宇文氏はもともとは、匈奴であり、南匈奴単于の遠属であった（周一良「論宇文周之種族」『歴史語言研究所集刊』七―四　一九三九年、のち『周一良論集』一　遼寧教育出版社　一九九八年所収）。内田氏によると、宇文氏は三世紀に南匈奴部族連合体から鮮卑系部族連合体に参加した。（内田吟風「南匈奴に関する研究」『北アジア史研究　匈奴篇』　同朋舎　一九七五年）。馬長寿氏によると、もともと陰山東部にいた宇文氏が、二世紀に東遷し、遼西のシラムレン河上流の鮮卑を統治し、檀石槐の組織した、遼東から敦煌にまで広がる鮮卑の部落軍事同盟に加入した。以後鮮卑に同化して、段氏鮮卑・慕容鮮卑とともに東部鮮卑に数えられる宇文鮮卑が成立した（馬長寿『烏桓与鮮卑』上海人民出版社　一九六二年　四頁、二九―三〇頁）。その後東部鮮卑中慕容鮮卑が最も有力となり、宇文鮮卑は段氏鮮卑とともに慕容鮮卑に併呑された（馬氏同上書　三七頁）。東部鮮卑の西にいた拓抜鮮卑が樹立した北魏が三九八年に慕容鮮卑が立てた後燕の首都鄴と中山を征服した後、後燕支配下の胡漢両族の三六万人を平城に移した。宇文氏も移動者の群れに伍し、平城や武川鎮に移動した（馬氏同上書　五〇―五一頁）。

(2) 拙稿①「元氏研究」（『中国中世の文物』京都大学人文科学研究所　一九九三年）②「劉氏（独孤）氏研究」（『琉球大学法文学部紀要　日本・東洋文化論集』一　一九九五年）、③「陸氏研究」（『中国中世史研究　続篇』京都大学学術出版会　一九九五年）、④「于氏研究」（『琉球大学法文学部紀要　日本・東洋文化論集』六　二〇〇〇年）参照。

(3) 宇文盛は『周書』二九宇文盛では「代人」とのみ記されているが、『隋書』六一宇文述伝では「代郡武川人」となっている。

(4) 厳耕望「北魏尚書制度考」『歴史語言研究所集刊』一八　一九四八年参照。

(5) ①内田吟風「北朝政局における鮮卑北族系貴族の地位」(『東洋史研究』一―三　一九三六年　のち『北アジア史研究　匈奴篇』　同朋舎　一九七五年所収)、②谷川道雄「北魏末の内乱と城民」(上)(下)『史林』四一―三・五　一九五八年、のち『増補　隋唐帝国形成史論』　筑摩書房　一九九八年所収)

(6) 六官制度下の官と尚書省の官との対応関係については、①王仲犖『北周六典』(上)(下)一九七九年　中華書局参照。以下、逐一注記しないが、六官制度下の官と尚書省官との対応関係は、上記の王氏の書を参照。六官制度下の官については、王氏書以外に、②雷依群『北周史稿』(陝西人民出版社　一九九九年　三六―五二頁)にも説明がみえる。

(7) 北魏代の武官については、浜口重国「正光四五年の交に於ける後魏の兵制に就いて」(『東洋学報』二二―二一九三五年　のち『秦漢隋唐史の研究』[上]　東京大学出版会一九六六年所収)参照。西魏・北周の武官については、浜口重国「西魏の二十四軍と儀同府」(『東方学報』八　一九三八年、『東方学報』九　一九三九年　のち『秦漢隋唐史の研究』[上]　東京大学出版会　一九六六年所収)参照。

(8) ただし、『周書』一三宇文達伝校勘記では(中華書局標点本)、右一軍総管は東征軍にはなかった。

(9) 西魏と北周においても統轄する州の抱える戸数により、州刺史の官品が定められていた。『魏書』一〇六上・中・下に記載されている州の中、戸数が書かれているのは、東魏領の州であり、西魏領の州は記されていない。したがって上記の行華州事・岐州刺史・蒲州刺史・荊州刺史・宜州刺史の官品はわからない。

(10) 北周にとり巴蜀が関中に食糧を提供する地方であったことについては、史念海「開皇天宝之間黄河流域及其附近地区農業的発展」『人文雑誌』一九五九―六　一九五九年、のち『河山集』　生活・読書・新知三聯書店一九六三年所収）参照。

(11) 河陽が洛陽を防禦する上で、重要地点であったことは、唐代に限った考察ではあるが、日野開三郎「唐河陽三城節度使考」『史淵』一四　一九三六年、　のち『日野開三郎　東洋史学論集』一　三一書房　一九八〇年所収）参照。

(12) 唐代の中書省官については、礪波護「唐の三省六部」（唐代史研究会編『隋唐帝国と東アジア世界』汲古書院　一九七九年　のち『唐代政治社会史研究』同朋舎　一九八六年所収）参照。

(13) 唐代の尚書省郎官については、礪波護（12）研究参照。

(14) 『周書』二二柳帯韋伝に「時譙王（宇文）俠為益州総管、漢王（宇文）賛為益州刺史。高祖乃以（柳）帯韋為益州総管府長史、領益州別駕、輔弼二王、総知軍民事」とある。

(15) 宇文炫は『新唐書』七一下宰相世系表一下では宇文審の子となっているが、『元和姓纂』六では宇文寛の子となっている。今暫く『元和姓纂』六に従っておく。

(16) 武川鎮軍閥については、谷川道雄「武川鎮軍閥の形成」（『名古屋大学東洋史研究報告』八　一九八二年　のち『増補　隋唐帝国形成史論』　筑摩書房　一九九八年所収）参照。

(17) 虜姓施行については、(5) ①研究と浜口重国「西魏における虜姓再行の事情」（『東洋学報　説林』二五―三　一九三八年、　のち『秦漢隋唐史の研究』［下］　東京大学出版会　一九六六年所収）参照。

(18) 北周において胡俗・胡語（鮮卑語）が維持されていたことについては、(5) ①研究と (6) ②書（二二〇

一二四〇頁)、唐長孺「拓跋族的漢化過程」(『歴史教学』一九五六年　のち『魏晋南北朝史論叢　続編』生活・読書・新知三聯書店　一九五九年所収)参照。

(19) 呂一飛『胡族習俗与隋唐風韵—魏晋北朝北方少数民族社会風俗及其対隋唐的影響』　書目文献出版社　一九九四年)参照。

宇文氏系図

①宇文活撥・宇文福の系統

宇文活撥——□——宇文福

②宇文阿生・宇文忠之の系統、

宇文阿生——宇文侃——宇文忠之

③宇文豆頽・宇文麒麟の系統

宇文中山―宇文豆頽―宇文麒麟―宇文永
- 宇文深
- 宇文測

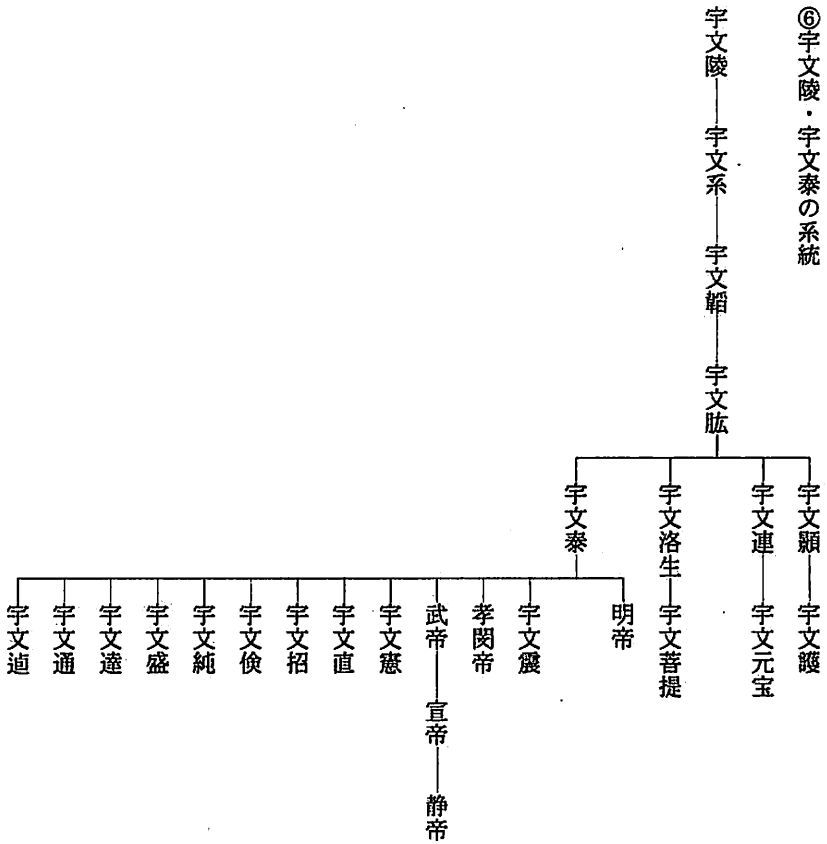
④宇文求男・宇文金殿の系統

宇文晋陵―宇文求男―宇文金殿―宇文顕和
- 宇文神慶
  - 宇文静礼
    - 宇文皛
    - 宇文協
- 宇文神挙
  - 宇文誼
  - 宇文同

⑤宇文直力覲・宇文弢の系統

宇文直力覲―宇文珍―宇文弢
- 宇文紹
- 宇文瑗
- 宇文倹―宇文節―宇文嶠―宇文融
  - 宇文宣
  - 宇文審
  - 宇文寧
  - 宇文寛―宇文炫

⑥宇文陵・宇文泰の系統


宇文陵
宇文系
宇文韜
宇文肱
宇文顯
宇文護
宇文連
宇文元宝
宇文洛生
宇文菩提
宇文泰
明帝
宇文震
孝閔帝
武帝
宣帝
静帝
宇文憲
宇文直
宇文招
宇文倹
宇文純
宇文盛
宇文達
宇文通
宇文迪

⑦宇文陵・宇文洛の系統

宇文陵―宇文仲―宇文興―宇文洛―宇文裕―宇文離惑―□―宇文庭立―宇文邈―宇文鼎

⑧宇文虬の系統

宇文虬

⑨宇文伊興敦・宇文盛の系統

宇文伊興敦―宇文長寿―宇文文孤
- 宇文盛
- 宇文丘

⑩宇文莫豆干・宇文貴の系統

宇文莫豆干―宇文貴
- 宇文善
- 宇文忻
- 宇文愷
  - 宇文儒童
  - 宇文温